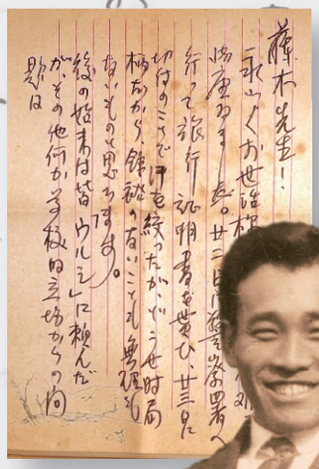
EAA EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS

THE UNIVERSITY OF TOKYO KOMABA MUSEUM

もうひとつの一高

戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち



東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館 1階展示室北側

2022年3月22日㊋ —— 6月24日㊎

開館時間：10:00〜17:00／入場無料

休 館 日：毎週土・日・祝日

凡例

・旧漢字・変体かな・踊り字は、基本的に現在の通行の字体に統一する。
・旧仮名遣いは、そのまま残す。

※本展示に関わるパンフレット・展示品等の中に現代では使わない不適切な表現がありますが、原文の歴史性を考慮し、そのままとしました。
※「第一高等学校特設高等科規程」では、特設高等科は「中華民国及満洲国」（1935 年改正以前は「支那」）の留学生を対象とすることが記されています。ここでの「中華民国」は、1937 年以降の現地対日協力政権、また 1940 年以後は汪兆銘政権を指していました。

目次

開催に寄せて（森山 工）…… 1頁
ご挨拶（中島 隆博）
開催趣旨…… 2頁

展示概要

1. 藤木邦彦――経歴と人物（宇野 瑞木）…… 4頁
2. 一高の留学生課長の任務と実態（宇野 瑞木）…… 7頁
3. 特高生はどこから来て、どこへ行ったのか（高原 智史）…… 9頁
4. 護国会と戦時下の学校生活（宋 舒揚）…… 11頁
5. 特高生の地下活動（横山 雄大）…… 13頁
6. 移動の制限と「疎開」（日隈 脩一郎）…… 15頁
7. 拝啓 藤木先生――戦争のなかの日常（日隈 脩一郎）…… 18頁
8. 特高生の山形県への疎開（髙山 花子）…… 20頁
9. キリスト教による一高のもうひとつの絆（高原 智史）…… 22頁
10. 戦後の特高生（横山 雄大）…… 24頁
11. 北京一高会と1980年代以降の日中交流（宋 舒揚）…… 25頁
12. 写真で見る駒場と一高生活――特高生の過ごした場所（小手川 将）…… 28頁

資料編

年表・もうひとつの一高…… 31頁
藤木邦彦略年譜…… 37頁
特設高等科生出身校一覧（1943年名簿より）…… 39頁
藤木文書書簡一覧…… 42頁
展示品目録…… 44頁
主要参考文献一覧（刊行年順）…… 46頁
【付録】 藤木成彦氏インタビュー…… 47頁

謝辞（石井 剛）…… 57頁

開催に寄せて

旧制第一高等学校は、新制東京大学に設置された教養学部の前身です。「新制」ということばは、過去を断ち切り、新しい存在として生まれ出ること、すなわち「新生」ということばを想起させます。しかし、「新制」は過去からの切断を意味するだけではありません。無から有を生み出すのでない以上、「新生」が可能となるためにはそのための素地が必要だからです。その意味で、教養学部には旧制一高から引き継いだものがあるはずです。

この度公開される「藤木文書」は、教養学部と旧制一高との断絶性とともに、その連続性について考えるよい契機です。歴史的・社会的な状況の断絶と連続があります。組織としての断絶と連続があります。そして、そういう状況や組織に生を紡ぐ一人ひとりの生き様にも、断絶と連続とがあるでしょう。今時の企画が喚起するのは、われわれと戦時下の彼らとの部分的な断絶であるとともに、部分的なつながりでもあるのです。

2022 年 3 月 22 日
東京大学大学院総合文化研究科・教養学部長
森山 工

ご挨拶

東京大学東アジア藝文書院（EAA）は、東京大学と北京大学による研究教育共同プログラムです。2019 年 4 月より始動し、東アジアから新しいリベラル・アーツを構想・発信すること、そして 30 年後の世界を担う人材を共に育成することを目指して活動しています。

過去を振り返りますと、かつて一高に留学して来られた中国人の先輩たちがこの駒場キャンパスで学んだ歴史があります。EAA の活動は、この歴史に真摯に学ぶことから始められなければなりません。こうした思いのもと、EAA では駒場に眠っていた戦時下の一高の留学生関係資料「藤木文書」の整理・公開に向けて「藤木文書アーカイヴ」プロジェクトを立ち上げ、様々な方のご協力をいただきながら活動を行ってまいりました。

このたび、その成果をお披露目できることを心より嬉しく思います。そして、この展示が東アジアの未来の姿を、日中両国がともに手を携えて構想していくためのささやかな礎になればと願ってやみません。また、EAA の活動はダイキン - 東大産学協創協定のもとで運営されています。ダイキン工業株式会社のご支援に感謝します。

2022 年 3 月 22 日
東京大学東アジア藝文書院長
中島 隆博

開催趣旨

この度、初公開となる新出資料の東京大学駒場博物館蔵「藤木文書」は、昭和 18 年（1943）から昭和 20 年（1945）頃に旧制第一高等学校（通称「一高」）で留学生課長を務めていた藤木邦彦（1907-1993）が遺したと思われる留学生関係の文書群である。570 件余の小規模ながら貴重なこの資料群は、昭和 18 年頃から日本の敗戦に至る激動の時期の一高における中国人留学生教育の現場から、留学生一人ひとりの状況を生々しく伝えるものである。

一高における中国人留学生の受け入れは、明治 32 年（1899）に清国より留学生 8 名を聴講生として迎えることから始まった。明治 41 年（1908）に、留学生専用の一ヶ年課程として「特設予科」が設置されたことをもって本格化する。その後、昭和 7 年（1932）の「特設予科」廃止とともに創設された三ヶ年課程「特設高等科」は当初、中国人のために始められたが、戦時下は受け入れ対象地域が「大東亜共栄圏」にまで広がった。戦後は、敗戦により日本の支配から離れた台湾や朝鮮からの生徒も特設高等科生（特高生）に含まれることとなった。

本展示では、藤木邦彦という人物を核として、昭和 18 年（1943）に設置された一高における留学生課長の職務とその実態について迫るとともに、多様な出自や背景をもって一高に留学してきた特高生たちに焦点をあてている。とりわけ、特高生たちが藤木宛にしたためた 50 通弱の書簡類は、彼らの休学中の帰省先や集合教育という名で行われた疎開先等での状況が把握できる貴重な資料であり、日本語で手紙を書く苦労や親しみやすい藤木の人柄も偲ばれる。これらの書簡を含む文書類は、全寮制の自治精神において語られる所謂「一高」に関する歴史叙述には収まりきらない、より複雑で多様な「もうひとつの一高」の姿を垣間見せてくれる。戦時下の特高生たちは、一高の本科生とは全く異なる管理監視体制の下で悩み、特高生内部においても葛藤を抱えながら、他方では一高の教員を慕い、「一高生」としての誇りを胸に青春時代を生きた。

本展示は、この「藤木文書」を窓口に、当時の一高における特高生たちの実態、その後の特高生たちの同窓会での交流までを含めた戦後における活動を、彼らの刻んだ歴史として示そうと試みた。ぜひ、「藤木文書」から浮かび上がる「もうひとつの一高」を体験していただきたい。

東京大学東アジア藝文書院（EAA）
「藤木文書アーカイヴ」プロジェクトメンバー一同

展示概要

1. 藤木邦彦――経歴と人物

藤木邦彦（1907-1993）は、熊本生まれの日本古代史の研究者である。父母は早くに亡くなり、熊本で祖父母に育てられた。教育熱心な祖父・武彦は邦彦を連れて上京し、東京市立青南小学校に転学させた。その甲斐あって一高文甲への入学を果たす。昭和 2 年（1927）に東京帝国大学文学部国史学科に進学、同期には、竹内理三・川崎庸之・宝月圭吾らがいた。昭和 5 年に同大学院に進み、昭和 7 年（1932）の修了とともに一高の講師となる。昭和 14 年（1939）には同教授となり、戦後は東京大学教養学部教授を務めた。昭和 10 年（1935）の一高の駒場移転から昭和 43 年（1968）に退官するまで、駒場で教鞭を執った期間は 33 年間にわたった。

一高における留学生との関わりにおいては、昭和 7 年に一高に日本史講師として着任して以来、特設高等科生の授業も受け持った（昭和 12 年以後は附属予科も担当）。

主な仕事としては、単著に基礎学選書の『日本史』（世界書院、1950 年）、昭和 30 年代の代表的な通史シリーズ『日本全史』第三巻・古代Ⅱ（東京大学出版会、1959 年）等の他、藤木の専門である平安時代の制度・文化に関する専門書がある。これら学術書の他に、高等学校の日本史教科書・山川出版社『詳説日本史』の著者としても知られる。また一高史編纂においても中心的な役割を果たしており、『第一高等学校六十年史』（第一高等学校、1939 年）や『向陵誌』駒場篇（一高同窓会、1984 年）、『嗚呼玉杯に花うけて　第一高等学校八十年史』（講談社、1972 年）等の編纂・執筆を担当している。

人柄は実直・温容であり、国籍にかかわらず誰に対しても丁寧な態度で接した。没後 15 年の平成 20 年（2008）には、その学恩や人柄を偲び追悼号が出されている。またメモ魔で几帳面であったという証言もあり、東大を退官した昭和 43 年（1968）以降、数年かけて和紙に墨書で藤木氏の略史・系図『加茂藤成記』をまとめている。そこに残された細かな書き込みと校正の跡からは、根っからの歴史学者気質が伺える。野球や落語を好み、ビートルズを愛聴した一面もあった。

（宇野 瑞木）

藤木邦彦「かつての善隣友好の場――東京大学教養学部本部」

（『教養学部報』28号、1954年2月）

特設高等科の専用校舎として、昭和10年（1935）に一高が駒場へ移転する際に建てられたのが「特設高等科教室」、略して「特高館」、すなわち現在の101号館（昭和11年竣工）である。昭和29年（1954）2月には、既にこの建物がなぜ「特高館」と呼ばれるか分からなくなっていた。藤木は「特高館こそは、善隣友好の精神を象徴する、ひとつのささやかな記念碑」と明言している。この「善隣」という言葉は、一高が初めて清国留学生8名を受け入れた明治32年（1899）の入学式式辞で狩野亨吉校長が一高生に呼びかけた言葉でもあった。

「藤木邦彦ニ日本史講師嘱託ノ件」

昭和7年（1932）6月7日付けの藤木の一高講師の採用人事書類。「日本史講師」としての採用で、一ヶ年の報酬は「金参百円」であった。また同時に「特設高等科日本史講師」の人事書類も作成されており、「毎週受持時数三時間」で報酬は同じく一ヶ年「金参百円」と書かれている。

鳥海靖「藤木邦彦先生を偲ぶ」

（『歴史と地理　日本史の研究』161号、1969年2月）

藤木について「大人と呼ぶにふさわしい温容なお人柄」と評し、また戦時中に特設高等科で藤木の薫陶を受けた生徒の中には、本国で学術・文化の発展・交流へ大きな貢献をした人が少なくないと述べられている。「最近、中国やモンゴルから来日した長老級の学者の方々から、一高で藤木先生に学んだ懐かしい想い出を、しばしばうかがうことがある」というのは、藤木文書に手紙が残る蒙古学の権威で内蒙古大学学長（1981年）も務めた特博信瓦齋爾（トブシン・ワチル）（昭和18年特文入学）のことと考えられる（展示6参照）。

藤木成彦「ビートルズとリンゴ箱の机――父の思い出」

（『史聚』41号（2008年3月）「特集・藤木邦彦先生の想い出」）

藤木の没後15年に編まれた追悼号に長男・成彦氏が父の思い出を綴ったエッセイ。子の目線からの野球、落語、ビートルズを愛好した藤木の素顔が伺える。成彦氏が台湾出張時に当時の教え子の一人に面会した際、「先生は優しい方でした。差別されるわれわれの味方でした」と言われたという話も見えるが、成彦氏によれば、この人物は昭和17年（1942）特文入学の胡秀山であった。胡は戦後も度々藤木自宅を訪れていたという（展示3も参照）。

藤木邦彦『日本史』の校正原稿

藤木邦彦『日本史』（世界書院、1950年）

昭和25年（1950）に世界書院から刊行された『日本史』の藤木直筆の草稿。近現代史の部分の朱入れからは、藤木の戦後間もない時期の歴史観が確認できる。藤木がこの後手掛けることになる通史ものや日本史教科書の雛形となったと考えられ、戦後の歴史教育への影響という面からも、彼がどのような部分に修正を施しているかは注目に値する。

藤木邦彦・宝月圭吾『詳説　日本史』（山川出版社、1967年版）

藤木はおなじみの山川出版社の日本史教科書の著者としても知られる。共著者の宝月圭吾は、東京帝国大学文学部国史学科の同級生。

藤木邦彦『平安時代の貴族の生活』

（至文堂、1960年）

藤木の専門は平安時代の政治・制度・文化史である。その主著には本書をはじめ、『平安朝文化史論』（東光協会出版部、 1948年）、『平安時代の文化』（日本教文社・日本人のための国史叢書、1965年）、『平安王朝の政治と制度』（吉川弘文館、 1991年）等がある。また論文も「陣定について」など多数あり、晩年には本人が好きだったという説話・伝説に関する論文も残している（「藤木邦彦略年譜」参照）。

藤木邦彦『加茂藤成記』

（1968年から1974年頃成立）

藤木が東大退職後に数年かけて和紙に墨書でまとめた藤木氏一族の略史と系図。藤木氏は、賀茂県主を本姓とする賀茂氏の一族であり、平安末期に十六の支流に分かれたうちの「成」の一族に当たることから、この書名となったという。その後、関ケ原の戦いの後は細川幽斎に従い豊前小倉、さらに肥後熊本に移り住んだこと等が記される。江戸初期には、典薬頭の駿河守成定や書博士の甲斐守敦道ら能書家が出た。

2. 一高の留学生課長の任務と実態

藤木は、一高着任から 10 年余り経った昭和 18 年（1943）、35 歳で留学生課長に着任した。この年、一高では大幅な組織改編が行われ、それに伴って新設された修練部の中に留学生課が設けられた。その任務は、特高生の生活指導、学資・通信・旅行の管理、進学指導、卒業生との連絡、諸機関との連絡に関することと規定されており（『第一高等学校一覧』昭和 18-19 年、59 頁）、藤木文書の中心をなす留学生の生活全般（生徒名簿、出欠管理、護国会関係）、身分管理（「旅行許可願」、休・退学、転・進学、身分証明書）、書簡・通信記録、非常措置関連の文書類とその任務内容は対応しているといえる。

また翌昭和 19 年（1944）から終戦までは生徒主事も兼任した。生徒主事は文部省直轄諸学校官制で「生徒ノ訓育」担当として定められた役職で、生徒全般の世話役を担うが、これとは別に特高生専門の留学生課長が設けられた背景には、特高生を取り巻く情勢の変化があったであろう。

太平洋戦争に突入した昭和 16 年（1941）以降、国家の統制が厳しくなるにつれ特別高等警察や憲兵が一高に頻繁に出入りし、特高生を拘引する事態が生じていた（展示 5 参照）。一高側としては、時局柄、困難な状況下に置かれた特高生の安全・監視両面における特別な配慮の必要が生じた。留学生課長へは疎開・帰省先の特高生からの書簡が多く残されているが、その文面からは、こうした厳しい状況下で、藤木が留学生たちに分け隔てなく接し、各生徒の事情をくみ取り、細やかに面倒をみていた様子が伺える（展示 7 参照）。

藤木が留学生課長であった期間については不明だが、昭和 20 年（1945）2 月までは日誌などで「藤木留学生課長」という呼称が確認され、昭和 19 年度までは少なくとも継続していたようである。昭和 20 年 5 月 25 日から 26 日にかけての空襲では、一高の敷地内に多数の焼夷弾が落下し大きな被害を被っているが、この時、藤木をはじめとする教員たちも居宅を焼失した。藤木は、この後、熊本に帰郷したと推測される。自身でまとめた藤木氏一族の略史『加茂藤成記』によれば、敗戦を熊本で迎え、その年の 12 月に長男誕生、翌年には一高校務のため単身で上京している。昭和 21 年 4 月の時間割にその名前が見えるまでの約一年間、藤木は一高の校務や教務に関わっていない。

（宇野 瑞木）

「職員（昭和十八年九月一日現在）」

（『第一高等学校一覧』昭和18-19年）

昭和18年（1943）、それまで教務、庶務、寮務の三部で構成された校務は、教授、修練の二部と庶務課、会計課へと再編成され、修練部の中に留学生課が新たに設置された。他方、教務課では生徒の学籍、休学退学、大学入学、出欠席、その他の教務や卒業生に関する事項が含まれており、これらとは別に留学生だけに対応する課が新たに設けられた形であった。

『訓務掛日誌』昭和18年9月25日条

昭和18年の『訓務掛日誌』の9月25日（土）の記録に「特高科生徒（同学会）日高、藤木両教授歓迎会（午後二時同窓会館ニテ）」と見え、同じタイミングで特設高等科及同附属予科長に任命された日高第四郎とともに同窓会館で歓迎会が催されたことが知られる。またその二日前には、宿直欄に「藤木留学生課長」と記入されているのが確認できる。

「本校特設高等科貴（館）見学御依頼ノ件」草案

（昭和18年10月作成）

藤木は、昭和18年10月に3日間にわたり特高生を都内の各文化施設見学に引率した。この文書は各施設への依頼の草案。実際には、上野科学博物館に38名（27日）、毎日新聞社に毎日天文館に41名（28日）、上野帝室博物館に40名（30日）を引率した（駒場博物館蔵『生徒課日誌』昭和18年7月-昭和18年12月）。その見学の目的については「都内文化施設実地教育」のためと書かれている。他の候補としては、放送局、海軍館、外苑絵画館、鉄道博物館が挙がっていた。

「中国からの留学生」（『向陵誌』駒場篇、一高同窓会、1984年）

昭和16年（1941）4月特高予科に入学した鄭南金（昭和19年特理卒業）が、一高を振り返って綴った文章に、生徒主事の藤木のことが次のように出てくる。「いつもにこにこと暖かい顔つきで、我々のために色々と気を配って下された」、「難しい日本歴史の人名を、いつも仮名を使って教えられた。日本の官幣大社、聖徳太子、遣唐使などの講義は今でも頭に残っている。留学生の困ったことや悩みなどを先生に打ち明けることができたので、すべての留学生の間に尊敬と感激の思いがあった」。また、特高館（101号館）の図書室は、中国語の本が大部分で、管理は留学生に任せられており、特に皆の愛読書であったのは、エドガー・スノーやスターリンの中国語訳の本であったという。

『組別時間割綴（No.16）』（昭和20年4月）

空襲が激化してきた昭和20年（1945）4月からの時間割。藤木は特文Ⅱ（水5限・木5限）、附属予科の歴史（水6限・土5限）を担当。この後5月25－6日にかけてB29 来襲による校舎焼失のため、同7・8月に作成された時間割では同窓会館や無声堂等が教室に使われたことが確認される。同11月作成の時間割に「二月十八日ヨリ本科トハ別ニ授業スルコトトセリ（従前ハ本科ト同時ニ授業セリ）」とあるように、2月までは特高生は本科生と一緒に授業を受けていた。なお、藤木の名は7月以降の時間割に見えず、翌年4月から復帰している。

3. 特高生はどこから来て、どこへ行ったのか

「中華民国及満洲国ノ留学生ニ対シ」教育を施すとされていた特設高等科には、具体的にどこから生徒が集まり、どこへ進学していったのだろうか。

「昭和十七年度特設高等科入学志願者出身校調」（藤木文書 2-2）によると、奉天（現瀋陽）にあった南満中学堂からの合格者が 5 名で最も多く、次いで多いのは北京育英高中で 3 名である。両校からは不合格者も出ていない。同年の志願者心得発送名簿（藤木文書 2-4）を見ると、多くの学校へは 5 部発送されているところ、南満中学堂へは 10 部で、同校には一高側からの期待もかけられていたことが分かる。

同年の「特設高等科出身省別調」(藤木文書 15-10) では、110 名のうち「満洲国」奉天省が 27 名で最多。次いで多いのが河北省の 17 名。総じて、「満洲国」、また華北の出身の生徒の数が目立つ。

台湾や朝鮮といった植民地の生徒も留学に際しては、外国人扱いされた。明治 44 年（1911）に文部省令である「外国人特別入学規程」が朝鮮籍及び台湾籍の生徒に準用され、昭和 4 年（1929）まで続けられた。それ以降は、朝鮮籍、台湾籍の生徒は、一高に入学するにあたり、日本人と同じ入試を受けて、本科に入ることとなった。終戦後は、昭和 21 年（1946）に「外国人留日学生取扱要領」が出され、朝鮮籍等の生徒は再び外国人扱いとなった。同要領で、一高特設高等科は存置し、中国だけでなく広く外国人学生一般を受け入れるべきことと規定された。

いわゆる「大東亜共栄圏」が広がると、特設高等科には「満州国」や中国（汪兆銘政権）を越えた地域から生徒が集まった。ビルマ総理やフィリピン司法大臣の子息の名前が名簿に載せられている（藤木文書 8-13-3）。

特設高等科を卒業した生徒たちは、どのように進学したのだろうか。昭和 19 年（1944）卒業予定者の進学先の一覧が残されている（藤木文書 8-4）。文科では東京 1 名、東北 1 名、京都 2 名。理科では東京 4 名、京都 9 名、九州 1 名、大阪 1 名と、京都帝大への進学者が多い。これは京都帝大が留学生の受け入れに積極的な姿勢を示していたからで、無試験での進学が認められることもあった。

一高生徒主事の藤木から大学側へ「何分宜シク」（藤木文書 8-2）、「格別御世話」（藤木文書 8-3）などと、特高生の入学志願について配慮を依頼する書簡も残されているが、必ずしも功を奏するとは限らず、進学に苦労した留学生もいた。

（高原 智史）

「昭和十七年度特設高等科入学志願者出身校調」

南満中学堂の5名、北京育英高中の3名、奉天第七国民高校の2名を除く外は、合格者1名の学校が並ぶ。この表から見る限り、特定の学校の出身者が多くを占めるのではなく、数々の学校から幅広く生徒が集まっていたことが分かる（「特設高等科生出身校一覧（1943年名簿より）」も参照）。

「昭和十七年度特設高等科附属予科入学試験志望者心得発送名簿」

大使館など政府機関の他、教育系機関、中等学校、予備校へ「心得」が発送されていたことが見て取れる。中等学校について合格者数と照らし合わせていえば（前資料参照）、ほとんどの学校には5部発送されているのに対し、10部発送されている南満中学堂は合格者を多く出し、一高側の期待に応えているが、20部発送されている北京の興亜高級中学校からは合格者がなく、空振りに終わっている。

昭和二十年度留日学生総合入学試験による入学生徒一覧

昭和20年度（1945）留日学生総合入学試験で一高に入学することとなった生徒の名簿。文科14名、理科10名の中国籍の生徒の他、ビルマ総理とフィリピン司法大臣の子息が含まれており、いわゆる「大東亜共栄圏」へ留学元の範囲が広がっていたことが見て取れる。

特設高等科及び附属予科募集要項（1942年）

110名のうち、「満洲国」奉天省が27名、河北省が17名で多くを占めている。学校別の出身者をみると（展示３「昭和十七年度特設高等科入学志願者出身校調」参照）、極端に多くを占めている学校はないが（奉天にある南満中学堂が目立つ程度）、出身地についていえば、かなり偏りがあったことが見て取れる。

「身分ニ関スル届書」（1943年）

台湾から特設高等科に進学した胡秀山は福建に原籍を有し、中華民国籍で、台湾の国民中学を卒業していたが、この資料の通り、昭和18年（1943）に「大日本帝国臣民」へと帰化した。いったん特高生として入学した胡は、帰化後も本科生へと転換されることはなく、特高生として卒業した。胡は戦後も藤木家と交流があった（展示1参照）。

「昭和十八年度　特設高等科入学試験問題」

日本語、歴史・地理、理科、数学、英語が課されている。前年にはドイツ語も出題されていた。日本文解釈の問題では、「いづれの書をよむとても初心のほどはかたはしより文義を解せんとはすべからずまづ一通り見て次にうつり進みゆきては立ちかへりつつ幾遍もよむうちには始に聞えざりし心もそろそろと聞ゆるやうになりゆくものなり」という文章が出題されている。3年後の昭和21年（1946）にも全く同じ文章が出題されていて、一高が書物を読むに際して大事にさせたかった心得とも読み取れる。

「昭和十九年卒業予定」

京都帝大が留学生の受け入れを積極的に進めていたこともあり、京都帝大への進学が目立つが、東京帝大含め、他の大学にも進学している。分野では、医学部への進学が目立ち、他に、理科では機械など。文科では法政経へ進学し、文学へ進んだ者はいないようである。戦時体制を背景とした実学への傾斜がうかがわれる。

「第一次大学入学志願者名票」（1944年）

一つの大学、学部を選べ、その中でさらに学科に順位をつけて記すことができた。文系の学部では学科数が多くないので、学部内でさらに選択をする幅は狭かったが、工学部などでは学科が多く、多数の学科を書き連ねたものが見られる。

4. 護国会と戦時下の学校生活

昭和16年12月8日わが国はついに太平洋戦争に突入し、国家の統制はますます強化された。思想検察もきびしく、特別高等警察部の警官や憲兵が本校にも頻繁に出入りするようになり、校内はいよいよ陰鬱を加えた。

藤木邦彦「一高 80 年の歩み」

（『嗚呼玉杯に花うけて――第一高等学校八十年史』より）

戦時色が深まるなか、「籠城主義」を謳歌した一高においても自治の危機が叫ばれた。自治の精神を守り、象牙の塔に閉じこもるべきだとする意見がある一方、このような時局だからこそ、一高精神の真価を発揮させるべきであるという言論もあった。

しかし、戦時体制は否応なく生徒の生活に影を落とした。修業年限が短縮され、学校生活も細部まで規定された。なかでも体育活動の制限は、文武両道を唱える一高精神にとって大きな打撃となった。昭和 15 年（1940）12 月、全国高等学校長会議の決議により、一高校友会が解散し、護国会に生まれ変わり、体育活動を始めとする部活動管理の一元化が図られた。

昭和 18 年（1943）4 月に、文部省、全国高等学校校長会議は野球、庭球、卓球などの大会を廃止し、対抗試合は訓育に効果的と認める場合のみ許すなどの方針を言明し、9 月 24 日に学徒体育大会を全面的に禁止した。代わりに「総合戦技」や「学徒武道」など、「戦時学徒体育訓練要綱」の趣旨に基づく大会（実戦即応の訓練）を実施し、留学生を含めた生徒全体に対し日課鍛錬を課したほか、学徒修練の強化のために報国隊を設置し、戦争動員による身体の管理が一層厳しくなった。

この時期の部活動と諸行事は留学生も様々な思惑を抱きながら参加しており、日本人本科生と特高生の親睦を図る組織として棣華（ていか）会も引き続き活動していた。また、寮の部屋割りの仕方は戦時下体制においても変わらず、本科生と特高生が共同生活を送っていた。

（宋 舒揚）

「第一高等学校護国会規則」（改正試案 十八年六月）

昭和15年（1940）8月末、全国高等学校長会議の決議を受け、一高校友会の解散が決まり、翌年3月31日に一高護国会として再編され、「本校護国旗ノ精神ニ則リ職員生徒一体トナリ身心ノ鍛錬智徳ノ練磨ヲ図リ以テ至誠奉公ノ実ヲ挙グル」を目的として掲げた。一枚目の右上に赤鉛筆で「柳田」とあるが、護国会関係資料のなかには、一高教授兼生徒主事を務めた柳田友輔が関与した文書が数点あり、本資料もその一部であると思われる。

「特設高等科三年生（「満洲国」留学生）修学旅行報告」

昭和18年（1943）6月下旬に行われた特設高等科修学旅行の報告書。奈良、京都、名古屋、松本各地を見学し、「我国文化ノ渕源ヲ知」るとともに、「師弟同行、互イニ親和ノ情」を深める旅とされる。本報告書とは別に、「特設高等科三年生（中華民国留学生）修学旅行報告」もある。期間、見学日程、所見は省略されているが、旅行の内容が同じであることがわかる。

「昭和十八年度第一学年生徒基礎鍛錬 一期日程表」

戦時修練体制の一環としての、特高生を含めた生徒全体に課する基礎鍛錬の日程表である。週ごとに科目（防空、体操、陸上、行軍）を細かく規定し、防空訓練、体力章検定、防空組選大会などの行事も盛り込まれた。同年4月17日の高等学校長会議が野球、庭球、卓球などの体育活動を廃止する方針を言明して以降、「文武両道」を唱える一高精神の具現化される場がますます縮小していった。

「体力章検定成績（昭和十七年度）」（『訓務部報』1942年11月）

昭和17年（1942）11月6日に実施された体力章検定の成績記録。体力章検定とは、昭和14年（1939）から厚生省が実施した、15歳から25歳までの男子を対象とした検定である。100メートル走、2000メートル走、走幅跳び、手榴弾投げ、米俵運搬、懸垂の6種目を採点し、基準を満たした場合は体力章が授与される。本記録によれば、昭和17年は一高生の7割以上が受験し、種目別優勝者に特高生も名を連ねた。個人種目のほか、組選（組単位の対抗戦）なども行われた。

「護国会特殊行事計画一覧表（昭和16年）」

護国会各班の行事日程をまとめたものである。なかでも、日中生徒の親睦を図る棣華（ていか）会が、戦前から続いて活動していたことに注目したい。棣華会は昭和9年（1934）に日本人寮生が発起人となって結成されており、生徒全体が自動的に会員となった。部活動の一つとして寮に専用部屋（中寮24番）を持ち、昭和18年(1943）の時点で王鳳鳴、劉宗翼、穆瑞蕃、特博信瓦斉爾（トブシン・ワチル）、吉晋生など5名の特高生と6名の日本人生徒が住んでいた。

「第一高等学校特設護国隊非常時期編成表（第四表）」（1943年4月8日）

「第一高等学校報国隊非常時組成表」の一部である。報国隊は護国会を強化し、有事即応の体制を確立するために設立されたもので、護国会会員である教職員および生徒全員（留学生を含め）が所属することになる。

クラス別留学生一覧

一高自治寮の部屋割は基本的に部活動、または組選を基準とし、それらに当てはまらない生徒は一般部屋と呼ばれる部屋に住んでおり、特高生もその例外ではなかった。本一覧表は特高生を文・理、そして中（華民国）・「満（洲国）」にわけて、それぞれの部屋の場所をまとめて示したものである。全寮制を謳歌してきた一高だが、戦時中ということもあり、3割近くの生徒が在寮しておらず、通学生も一定数存在していた（展示11の『昭和十八年度寮生名簿』参照）。

5. 特高生の地下活動

昭和 6 年 (1931) の満洲事変以降、日本は中国大陸で自身の影響力を拡大する。日本は占領地域の拡大とともに汪兆銘政権のような対日協力政権を組織し、現地の統治を担わせた。特高生には対日協力政権が派遣した者も含まれ、将来的にはその統治に協力することが期待されていた。また、特高生には対日協力政権の要人を親族に持つものもいた。その代表例が周幼海であり、その父は汪兆銘政権で指導的役割を果たした周仏海であった。

しかし、特高生には留学先の日本で抗日活動に従事する者もいた。昭和 10 年 (1935) には、特高生は抗日的書籍の読書会である「九光会」を実施した。また、それぞれ昭和 14 年 (1939) と昭和 15 年 (1940) に、国民党と中国共産党の地下組織も特高生間で組織された。地下組織間では対立があったものの、日本の憲兵の調査の対象となった。そのため、昭和 17 年 (1942) には国民党地下組織所属の特高生 4 人が、昭和 14 年 (1944) には中国共産党の地下組織である「新知識研究会」所属の特高生 2 人が逮捕された。また、昭和 12 年 (1937)7 月に日中戦争が開始すると、9 月段階では多くの特高生（58 人中 39 人、「満洲国」からの留学生は 36 人中 13 人）は授業を欠席した。このように、特高生は自身の有する背景にもかかわらず、必ずしも日本に協力的ではなかった。

このように特高生は日本への協力と抵抗という二面性を有していた。そのために、日本の当局も曖昧な対応を迫られた。特高生の移動の自由は制限されており、警察の許可を得なければ東京を離れることができなかった。特高生はしばしば憲兵への出頭を求められ、日本側への忠誠心をテストされた。一方で前述の通り、複数の特高生が憲兵に逮捕されたが、その中には起訴猶予として釈放される者もいた。釈放後、学校、検事、憲兵、駐日「満洲国」大使館といった機関は処罰的な措置を採るとはかぎらず、復学に向け様々な便宜を図った。つまり日本側にとって、特高生は必ずしも信頼できるとは言えない管理の対象であったと同時に、将来の協力相手候補でもあった。そのため、特高生に対する日本側当局の対応も二面性を有していた。

（横山 雄大）

「陳謝状」（Aから第一高等学校校長安部能成宛て書簡）（1944年6月13日）

「当国留学生A復学依頼ノ件」

（駐日「満洲国」大使館参事官張家賓から一高校長安倍能成宛て電信）（1944年6月8日）

昭和17年(1942)2月には、複数の特高生が中国国民党の地下活動のために憲兵に検挙された。「情状酌量ノ上釈放」された特高生のAは、「満洲国」の文教部と駐日大使館から復学支援を得ていた。Aが安倍能成一高校長に「陳謝状」を送付しただけでなく、張家賓駐日「満洲国」大使館参事官も安倍へ打電していた。張は電報でAの父が「満洲国」軍将校のために起訴猶予が得られたと指摘し、彼の復学を依頼している。

「留日学生関係治安維持法違反事件不起訴処分者ノ復校ニ関スル件」

（新京高等検察庁次長井出廉三から一高校長宛て電信）（1944年5月4日）

「犯罪事実」

特高生であるBも同様に中国国民党の地下活動のために憲兵に逮捕された。逮捕後の調査によれば、Bはそもそも活動に積極的でなかった上に、検挙前の昭和15年(1940)12月には「脱退」済みであった。そのため、井出廉三新京高等検察庁次長は安倍校長に対し、「本件検挙以来深ク前非ヲ悔ヒ更生ヲ誓ヒ居リ犯情憫諒スヘキモノアル」として復学を依頼している。

「本校特設高等科生徒起訴猶予仮釈放処分報告ノ件」（1944年12月4日）

昭和19年(1944)には、複数の特高生が中国共産党の地下組織である「新知識研究会」での活動のために憲兵に検挙された。安倍校長は文部省専門教育局長と教学局長に対し、6名の特高生が「起訴猶予、仮釈放ノ処分相受ケ復帰改候」と報告しようとしていた。つまり、一高側は思想事件で逮捕歴のある特高生であっても、釈放後復学を受け入れていた。

「本校特設高等科卒業保留中生徒大学進入希望ノ件」（1944年12月4日）

一高側では「新知識研究会」の活動で検挙された特高生のうち、最終学年の三年生であった3名を「卒業保留」として取り扱っていた。しかし、安倍校長が言うには、3名が起訴猶予で釈放されると検事、憲兵や一高は「本人等ノ進学ニ支障ヲ来シタルヲ気ノ毒ニ思」っているとして、文部省専門教育局長に対し大学進学の取次を依頼しようとしていた。

Cから藤木邦彦宛て書簡（1945年4月16日）

釈放後復学した特高生のCは、昭和20年(1945)に疎開先の弘前から藤木に対し返信を認めていた。返信の書簡の中では、Cが「在京中（中略）御迷惑をかけ」（おそらく逮捕のことだろう）、そのために藤木が「連絡の仔羊を慰撫するが如く一方ならざるお世話をして下された事」に感謝が表明されている。

6. 移動の制限と「疎開」

総力戦における戦況の悪化は、さまざまな形で人々を締め付けてゆく。移動の自由の制限もその一つだ。昭和19年（1944）3月に閣議決定された「決戦非常措置要綱ニ基ク旅客輸送ノ制限ニ関スル件」はその冒頭で「戦力増強並ニ防空疎開ニ必要ナル輸送ヲ強化スル為国民戦意ヲ昂揚シ旅行ノ自粛徹底ヲ期スル」とともに、通勤通学を除いた交通の「徹底的制限」を宣言する。こうして旅客列車の本数は大幅に削減され、100キロメートル以上の移動には警察署長の許可が必要となった。昭和19年夏から20年2月までのあいだに申請が集中している旅行許可願は、特高生もまたそうした移動の自由制限と決して無縁ではいられなかったことを端的に示している。翌20年4月16日には、留学生管理を担った日華協会宛に、警視庁外事課から、都内外国人立ち知り禁止区域における中国人留学生取り締まり強化の通達が出されているが、すでに同年3月にはアメリカ軍による日本海域での機雷敷設、6月になると下関釜山間を運航する連絡船の廃止もあって、大陸への帰省はほぼ不可能となっていた。

移動の自由が制限される一方、昭和17年（1942）4月にはアメリカ軍による初めての東京空襲が行われるなど、都市部での暮らしは人々の生命を直接的に脅かすこととなった。昭和19年（1944）6月15日のアメリカ軍のサイパン島上陸、翌16日未明の八幡空襲以降、すでに計画されていた学童疎開は実施へと動き出し、8月4日の東京からの第一陣を皮切りに、全国の主要都市・重工業地帯を中心に進められた。特高生もまた、移動が制限される中にあったとはいえ東京を離れ、場合によっては故郷に帰ってそのまま再来日しないことも多く、結果的に戦火を逃れることにつながった。「疎開」とは元来軍事用語であり、単なる避難ましては逃避とは異なって自国民を対象とした軍事作戦に位置づけられているため、留日学生の離京は法的には疎開ではなく、移動先に集まって教育を受けるという体裁を取って「集合教育」と呼ばれた。旅行許可願、あるいはそれに伴う藤木宛の書簡からは、特高生たちめいめいの集合教育＝疎開事情の一端をうかがうことができるとともに、押し迫った状況下での彼らのゆくえをも知ることができる。

（日隈 脩一郎）

「決戦非常措置要綱ニ基ク旅行輸送ノ制限ニ関スル件」（昭和19年（1944）3月14日）

閣議決定の翌日、3月15日付『朝日新聞（東京版）』朝刊の1面には「学徒の帰省旅行は抑止」との小見出しが付された記事の中で「不要不急の旅行は全く禁止するほか直接戦力に関係なき旅行は国民の時局認識により自粛を徹底せしめんとするもの」との趣旨説明がなされている。「国民」とあるものの当然、留学生も例外ではなかった。

旅行許可願

旅行の目的は様々だったが、むろん観光は許されなかったようで、大学入学（藤木文書15-6-7）や葬儀参列（藤木文書15-7-35）などの名目で申請された一方、「盗難ニ遭ヒ身廻リ品再調ノ為メ」（藤木文書15-6-11）、「転校につき寝具類其他準備の為め」（藤木文書15-6-13）といった、苦肉の策めいた理由も見られる。2点とも1945年2月のものであり、目に見えて時局が悪化する中でなんとしてでも帰省したかった特高生の思いがうかがえるようである。

劉秉鐸（1944年9月）　＊藤木文書15-6-7

大学入学（京都）9月14日発

陳文彬（1945年2月3日）　＊藤木文書15-6-11

盗難に遭い身周り品再調（天津）　2月12日発4月1日帰着

趙連元（1945年2月2日）　＊藤木文書15-6-13

転校につき寝具類その他準備（ハルピン市双城堡）　2月10日発4月10日帰着

特博信瓦斉爾（トブシン・ワチル）（年月日不明）　＊藤木文書15-7-1

壮丁検査　昭和19年7月15日発10月15日帰着

石青山（年月日不明）　＊藤木文書15-7-10

家事相談（朔県）　1944年8月20日発10月19日帰着

胡治邦（年月日不明）　＊藤木文書15-7-24

錬成団参加（島根県大田市）　1944年8月6日発8月31日帰着

連纕（1944年7月28日）　＊藤木文書15-7-35

祖母の葬儀参列（張家口）　8月3日発9月25日帰着

書簡

旅行許可願の審査もそれほど厳密には行われていなかったようで、「家事相談」（藤木文書15-7-10）を名目に昭和19（1944）8月に帰省した石青山は、10月19日には東京に帰着予定だったものの書簡を投函した11月16日まで、日本に戻っていないことが分かる。また、旅行許可願提出にあたって「警察署方面に提出すべき留学生課々長先生の許可証一本の御作成」（藤木文書8-73）が必要であったことは、特高生に対して藤木が担っていた責任の重大さが分かる。

特博信瓦斉爾（トブシン・ワチル）（年月不明23日）　＊藤木文書18-15

警察署から出された証明書の受け取りを伝える

石青山（1944年11月16日）＊藤木文書8-57

家族看病のため休学を申し出ている

連纕　＊藤木文書8-73

祖母死去のため張家口への帰省を申し出ている
（次の名刺（18-10）と同封の可能性）

愛新覚羅憲容（1944年7月5日？）　＊藤木文書18-10

名刺の裏に、甥・連纕の帰省許可へのお礼が書かれている

清朝の流れを汲む憲容は当時にあって、京都帝国大学の旧・人文科学研究所に在籍し、1944年9月末には梅棹忠夫と共同で、内モンゴルへのフィールド研究に赴いている。自身も日本へ留学していた彼は、同じく故郷を離れて学ぶ甥・連纕を特に気にかけ、同時に帰省することを考えたのかもしれない。

7. 拝啓 藤木先生――戦争のなかの日常

藤木文書には、50 点ほどの書簡が含まれている。ほとんどが、特高生から藤木に宛てられた書簡であり、昭和 19 年（1944）から翌年にかけて書かれたものが大半を占める。その内容は、休学許可を藤木に請うもの、転進学等に係る各種証明書の発行依頼など、留学生課長・生徒主事としての藤木の職務に関するものが多い。このことから、書簡という媒体・形式が公的な手続きの一部に使われていたことが分かる。

一方、なかには、消息を伝え、あるいは藤木への謝意を伝えるような私的な性格の色濃い書簡も残されている。藤木が特高生にどのような内容・文体で手紙を書き送ったのかは知り得ないが、「私の為に御手紙を下さいまして本当に有難うございます。何時も先生には御世話様になり何とも御礼の申し上げ様がありません」（藤木文書 8-60）ともあるように、特高生の文章からは、藤木の特高生への厚情を読み取ることができる。そもそもここまで書簡が残されているのは、歴史学者であった藤木の単なる収集癖の結果ではなく、日常的な彼らの親密な交流の反映なのかもしれない。

近代における教師と生徒との関係は、単なる制度上のそれ、すなわち知識を与え、与えられるという関係を超えた、交感的なものであり得た。東京帝国大学で哲学を講じたドイツ人教師、ラファエル・フォン・ケーベル（1848-1923）と、彼の学生たちとの関係は、高い教養を備えた師とその謦咳に接した弟子たちの例として知られる。一高においても例えば、新渡戸稲造や内村鑑三と彼らを慕った生徒たちとの関係が有名である。しかしそれらの事例は、上述の例のように、外国人教師と日本人の学生・生徒、あるいは互いに日本人どうしの師弟関係についていわれることがほとんどだろう。したがって、外国籍の特高生と日本人教師･藤木との関係は稀少な例として興味を誘うものである。特博信瓦斉爾（トブシン・ワチル）の書簡に見える藤木への呼びかけ「先生！」は、率直に胸を打つものがある。彼らの絆ゆえに残ったとも言える書簡からは、戦時下における特高生の姿が浮かび上がってくる。

（日隈 脩一郎）

「欠席欠課ノ届出ニ関スル規定」＊藤木文書15-8
藤木宛の書簡には休学を願い出る内容のものが少なくないが、出欠管理と成績査定が教師の主要な業務の一つであることは、80年前と現在とでさして違いはないだろう。一方、教員の側も、休講の際はなるべく事前に、そうでなくとも後に必ず教務課に報告するよう定められており、ともすれば出席管理などなく自由放任だったかのように語られる「古き良き高等教育」像とその実態は異なったのかもしれない。

書簡

書簡からは、刻一刻と変化する情勢に一喜一憂する特高生たちの姿が浮かび上がってくる。短いながらも、東京を離れこれからの勉学への意欲と藤木への気遣いをつづる陳来峰の書簡（藤木文書8-53）は昭和20年4月に京都から投函されているが、5月1日付の劉宗翼の書簡（藤木文書8-60）によれば、戦況の悪化により東北本線の小山駅までしか切符が買えず、同じく京大への進学が決まりながらも肝心の京都行きが叶わないことへの恨みが吐露されている。

劉宗翼 1945年5月1日　＊藤木文書8-60
戦況悪化のため京都帝大入学準備ができないことを知らせている（福島県白河町）

陳来峰　1945年4月5日　＊藤木文書8-53
進学先の京都帝大からの挨拶（京都市左京区）

阮春瑩　年不明8月6日　＊藤木文書8-54
着阪の報告とおよびその遅延のお詫びをしている（大阪府北河内郡寝屋川町）

林自由　1945年4月13日以後、4月中　＊藤木文書8-74
空襲被害のため、長期欠席を申し出ている（大森区久ヶ原町）
「十三日夜の空爆により大塚の家は焼けました。それで此の一週間無断缺席を度（いた）しました事は御許し下さい」

楊永清　1945年5月17日　＊藤木文書18-11
病から立ち直った特高生の母からは、大空襲後の東京へ息子をいつ帰校させればよいかと健気な問い合わせが藤木に来ている（神戸市葺合区野崎通り）

李玉田　1944年6月27日　＊藤木文書18-26
許準　1944年6月27日　＊藤木文書18-27
勤労奉仕の現状を報告している（埼玉県大黒郡）

特博信瓦斉爾（トブシン・ワチル）　年月日不明　＊藤木文書18-23
入営延期・帰校予定を伝えている

「皆元気に働いて居ります」（藤木文書18-26）、「村民もその熱と精力に少々圧倒されてゐるやうです」（藤木文書18-27）と埼玉で日本人生徒とともに勤労奉仕に従事する特高生の言葉からは、静かなる一高生としてのアイデンティティを感じさせる一方、「留学生として一高に入ったことは何と言っても一つの抹消し得ない誇りとなって我を鼓舞し活動させてくれる」（藤木文書18-23）というトブシン・ワチルの言葉は、対照的な熱気を帯びている。

8. 特高生の山形県への疎開

昭和 20 年（1945）8 月、特高生が山形県倉王高湯に疎開した記録がいくつかの資料に残っている。一高の寮生たちが次々に軍施設での勤労動員で疎開するなか、特高生たちは、諜報上、勤労疎開できない状態にあった。卒業生の小足兵衛による「中国留学生高湯温泉疎開同行記」（『運るもの星とは呼びて』所収）によると、一高の教官とその家族、さらには本科生も同行し、合計で 44 名が参加、同年 9 月末まで山形にとどまったという。難航した疎開地探しが最終的に山形に行き着いた経緯は不明だが、当時の東北地方総監であり一高の卒業生である丸山鶴吉が尽力した伝聞の記録が残っている。

生徒主事による『寮務課日記』には、8 月 15 日付で「終戦ノ大詔下ル。講堂ニテ正午ラジオヲ拝聴。涙、汗ト共ニ下ル。コレヨリ先特高生ハ山形県高湯温泉ニ疎開」と書かれている。6 月 7 日には「特高疎開地調査のため山形県へ出張」という記述があり、7 月 21 日には、山形へ疎開する特高生送別のための晩餐会があったとも記されている。小足兵衛の「中国留学生高湯温泉疎開同行記」には、8 月 11 日にようやく留学生が山形に到着したと書かれているため、おおよその流れは一致する。小足は、東京大空襲の 1 ヶ月とすこし後に、教官 2 名と疎開担当の監事が疎開地を探すために鬼怒川に行ったと書いていたが、『寮務課日記』と照らすと、疎開地選定は最終的には教員側でなされたことがわかる。『寮務課日記』では一貫して疎開が特高生のためのものとして記録されており、空襲の激化で記録もまばらになる中、疎開地探しが出張によってなされるほど重点的な仕事であった様子が垣間見える。

昭和 19 年（1944）12 月 29 日に閣議決定した「留日学生教育非常措置要綱」には地方での留日学生向けの集合教育の方針が明記されている。これが文部省によって通達されたのは昭和 20 年 2 月 3 日で、2 月末までの転学が指示されていた。これと照合すると、一高の特高生の「疎開」は、急がれながらも、遅れた状況にあったと言える。一方、本科生も含めて大人数で 9 月末まで山形に滞在した背景には、一高側の特高生の教育や配慮も見受けられる。日華協会が疎開のための移動経費を補助したとされており、昭和 19 年、20 年の日中双方の留学生政策の具体例としても読み解けるだろう。

（髙山 花子）

藤木文書に残された写真

昭和9年（1933）の留学生送別会の写真を除いては、正確な撮影時期、撮影場所が不明な写真が合計9枚、藤木文書に残されている。「満洲国」国旗の映っているものや、学生服姿の若者の周りを幼い子どもたちが取り囲んでいる写真もある。東京を離れた特高生が、書簡とともに藤木に送った写真だろうか。

一高本館入口写真

1943年（昭和18）頃の写真と思われる。「教科書と学用品をリュックにつめて勤労班は出発する」とメモがある。特高生は、昭和17年（1942）6月に10日間埼玉県で勤労作業をしたと記録が残されている。翌年9月には、構内で除草や防空壕堀の勤労作業がはじまった。

高湯温泉と山形館の写真

特高生の受け入れ先であった山形県山形市の蔵王高湯温泉山形館。冬は美しい樹氷で知られ、夏は杯湖畔を登山客が楽しんだ。「高湯八景」と題された八枚綴の絵葉書セットの中には、「山懐のいで湯」という写真葉書があり、そこにも山形館が映っている。

「留日学生非常措置実施要領」

昭和20年（1945）2月7日、文部省が留学生疎開について指示し、通達した文書である。集合教育のために留日学生を転学させる措置や、大学の第3学年生は3月末までに仮卒業させすぐに帰国させる旨の指示が含まれている。藤木文書にも現物が残されている。

山形高校の佐藤三郎氏から藤木邦彦宛の葉書

日付は昭和20年（1945）4月23日。山形市の山形高校が満洲留日学生の受け入れを命じられていたことが伺い知れる葉書である。「一高からは今の処剣宋二君のみです. 蒙人留学生はまだ一人も見えませんが早く来ればよいと思つてゐます」と書かれている。

9. キリスト教による一高のもうひとつの絆

一高とキリスト教との結びつきは古い。一高が本郷移転以前、一ツ橋に所在した明治21年（1888）にはすでに一高に基督教青年会が組織され、明治43年（1910）前後には一高カトリック研究会が別に組織されている。

明治24年（1891）に、一高講師であった内村鑑三（1861-1930）は、教育勅語に対して不敬であったとされて一高を追われた。その後、信仰から内村を訪れる一高生が現れる。明治39年（1906）に内村の同窓生新渡戸稲造（1862-1933）が校長になると、その勧めで一高生の「内村詣（もうで）」も加速した。内村の下で生徒たちは柏会や白雨会といった会を形成して、親交を深めた。

柏会に参加し、後に一高教師となった人物として三谷隆正（1889-1944年）がいる。彼は基督教青年会の指導者となって、幾度も聖書研究会を主宰した。他に矢内原忠雄（1893-1961）や、田中耕太郎（1890-1974）といった、内村の後継世代によって、一高のキリスト教信仰は導かれた。

昭和13年（1938）以降戦後までの「基督教青年会記録」が駒場博物館に残されている。これを繙くと、朝鮮から金太熙という人物を師に迎えて集会が開かれたり、戦後は特高生となっていた（展示3の概要文参照）朝鮮籍の生徒が青年会に参加していたりしたことが分かる。仙台の第二高等学校は、明治28年（1895）に成立したキリスト者の寮である忠愛寮を有し、キリスト教信仰が盛んであった。二高の忠愛之友倶楽部から昭和15年（1940）に一高基督教青年会に届いた葉書が収められている。その書簡では、第二高等学校忠愛之友倶楽部の五十周年記念式典への招待がなされている。来場と祝辞等を感謝する葉書も残されている。京都の三高とのスポーツ交流の他にも、仙台の二高とのキリスト教交流が行われていたのである。

世代を越えた一高の中でのつながり、他の学校とのつながり、さらには、民族を超えたつながりがキリスト教を通して生じていたのである。

（高原 智史）

『基督教青年会記録』（1938年4月-1939年11月）

昭和13年（1938）の記録。三谷隆正などの教師や、卒業生の先輩を含め、キリスト者の間で交流がなされていた様子が見て取れる。10月14日には朝鮮から金太熙という人物を講師に迎えて集会が持たれた。金氏はキリスト者としてだけでなく、儒者としても扱われている。

『基督教青年会記録』（1939年11月-1950年2月）

昭和14年（1939）から16年、附記として昭和23年（1948）から24年の記録を含む。中寮十八番の部屋が基督教青年会員の部室として確立し、朝鮮籍の特高生2名が会に参加していたことが分かる。

ハートの可能性

昭和23年（1948）2月に催された一高最後の紀念祭における日中韓の生徒による「ハートの可能性」と題されたイベントの写真。韓国女性を演じているのは、特高生の中原孝一氏（次の「特高最後の卒業写真」では、前から三列目一番左の帽子姿の人物）。

特高最後の卒業写真

昭和24年（1949）12月19日、最後の試験を終えて、阿部秋生教授との記念写真。前から二列目左から二番目の帽子姿が特高生であった写真提供者の大原弘氏。大原氏と同じ朝鮮籍の生徒はこの中に9名いるという。

三谷隆正肖像

三谷は、一高出身で、内村鑑三に導かれてキリスト教信仰に入り、法制とドイツ語担当の教師として一高に勤めた。基督教青年会顧問として、幾度も集会を主宰した。写真は昭和11年（1936）に書斎で撮られたものという。

10. 戦後の特高生

昭和 20 年（1945）8 月には日本の敗戦により、これまで監視の対象であった特高生は一転して戦勝国民となる。しかし、その後も中国情勢は安定せず、国共内戦が繰り広げられた。内戦の結果、昭和 24 年（1949）に中華人民共和国が成立し、中華民国は台湾へと撤退した。

祖国の分断という状況を前にして、特高生はどちらの政府を支持するかという難しい選択を迫られた。中華民国側は留学生の帰国の際にその忠誠心を調査しており、帰国すれば漢奸として処罰される可能性があった。そのため、終戦直後には留学生は帰国が困難な状況にあり、多くの特高生は日本の大学へ進学し、留学を継続した。このような中国人留学生は他校にも存在したため、留学継続のための互助組織が必要となった。そのため、昭和 21 年（1946）5 月 22 日には包括的な中国人留学生（台湾出身者含む）団体として「中華民国留日同学総会」が組織された。そして、林連徳ら特設高等科の卒業生は「同学総会」を中華人民共和国支持に固めるなど、組織内で中心的な役割を果たした。

特設高等科の卒業生の多くは、中華人民共和国への帰国を選択した。海外で高等教育を受け外国語の運用にも長けていたため、多くは政府機関で幹部として働くよう求められた。その中には郭承敏のように、高い日本語能力を生かして中華人民共和国が国交を有さない日本に対する工作に従事する者もいた。しかし、そうした中でも、戦時下での日本留学という経験は問題視され、文化大革命のような政治運動では批判材料となった。

（横山 雄大）

11. 北京一高会と 1980 年代以降の日中交流

北京一高会の始まりは 1981 年に駐中国日本公使加藤吉弥（昭和 23 年文甲入学）が北京国際クラブで開いたコンパに遡る。北京にいる特設高等科出身者 30 数名が出席し、日本一高同窓会長（当時）の柳田誠二郎も臨席した。それ以降は北京在住の会員を中心に毎年忘年会や茶話会を催していた。

1986 年 9 月に北京沙灘全国工商聯会議室で茶話会が開かれ、幹事に朱紹文、張続祖、林連徳が選出された。1991 年 10 月に張続祖が仕事で日本へ移った後、連絡事務は林連徳が担当することとなった。以降、林が窓口になり、元特高生の情報を取りまとめ、1995 年から機関誌『北京一高会通信 嚶鳴』を不定期に発行していった。

「嚶鳴」は一高のホールであった嚶鳴堂と同じく、『詩経』「小雅・伐木」に由来する言葉で、友人同士が仲よく語り合うことを意味する。その内容は多岐にわたり、会員の履歴、近況報告、回想録、論文はもちろん、貴重な写真等も掲載されている。発行にかかる費用は会員より寄せられた。

北京一高会は日本の一高同窓会と常に連絡を取っており、ほぼ毎年中国を訪れていた一高同窓会長の柳澤一誠から多大な協力を得て、『一高同窓会会報』などの出版物や名簿等が彼の自費で寄贈された。また、中国の一高出身者が訪日、あるいは日本の一高出身者が訪中（例えば、向陵訪中団）する際に、その都度歓迎会を開いて、資料を共有したり、寮歌を歌ったりして、旧交を温めていた。

北京だけでなく、中国各地の元特高生の紐帯となった北京一高会は、2007 年に幕を閉じた。やがて 2012 年度末に一高同窓会の活動も会員の高齢化により終了した。本コーナーは 1980 年代以来、一高出身者の間でなされた、日中交流の知られざる一ページを、北京一高会と一高同窓会の資料を通じて紐解いていく。

（宋 舒揚）

『中国留日学生報』第36号（1949年10月11日）

『中国留日学生報』は「中華民国留日同学総会」の機関紙として発行されていた。これは1949年10月に人民共和国が成立した直後のものである。そのため一面の上部には毛沢東の肖像画が描かれ、毛沢東の声明や中華人民共和国国歌の紹介が行われている。また「同学総会」は人民共和国成立を祝う声明書を一面下部に掲載している。

林連徳『当代中日貿易関係史』（中国対外経済出版社、1990年）
「生徒資料作成資料」

林連徳は1923年に廈門に生まれ、昭和18年(1943)から昭和26年(1951)にかけて日本の東亜学校、一高特文や東大経済学部で学ぶ。東大卒業後すぐに中華人民共和国へ帰国すると対日業務に従事し、国際貿易促進会や対外貿易部などに所属した。

林連徳「向陵コンプレックス」（『一高同窓会会報 向陵』第39巻第1号、1997年4月）

林連徳が柳澤一誠に請われて、『向陵』に寄稿した回想録。一高で過ごした日々を振り返り、「向陵に対する想い」を熱く語っている。とりわけ戦時中の一高生活について、ストーム、「雑炊行列」、疎開、コンパなど、いくつかのエピソードを交えて活写している。林は1991年より北京一高会の連絡事務を担当し、同窓会活動に尽力した。

韓樹英『馬克思主義哲学綱要』（人民出版社、1983年）

韓樹英は1922年に大連に生まれ、1938年に大連の日本人中学校へ入学する。昭和17年（1942）に一高特理乙へ留学し、中国共産党の地下組織の「新知識研究会」に参加する。昭和18年（1943）夏に中国共産党の根拠地の延安へ向かい、以降教育分野に携わる。1950年、中国共産党の幹部学校である中央党校に進学し、卒業後は中央党校でマルクス主義哲学を教授した。

李徳純「民族愛に目覚めた留学生活」（『一高同窓会会報 向陵』第28巻第1号、1986年4月）
李徳純『戦後日本文学史』（人民文学出版社、2017年）

李徳純は1926年に遼寧省に生まれ、昭和19年（1944）に一高特文へと留学する。昭和21年（1946）には大陸の中国東北大学英国文学系へ転学する。中華人民共和国建国後には外交部亜洲司や中国社会科学院外国文学研究所に勤務した。

『北京一高会通信 嚶鳴』第25号（2001年4月）

崔培桂（昭和15年特理卒業）が一高同窓会長柳澤一誠の質問に応じ、特高生であった故白緑蔭について寄せた回想。白は特理乙に在学中、昭和12年（1937）に熱海の旅館で睡眠薬を飲んで自殺した。白の兄によると自殺の原因は家庭問題であった。だが崔は、盧溝橋事件後、白の精神が不安定で悲観的であり、また一高寄宿寮で特高生がいじめられることがあったため、自殺には政治的理由もあったかと推測し、情報提供を呼びかけた。

書簡（鮑耀東から林連徳宛て、2001年4月9日）

鮑耀東（昭和14年特理卒業）から林連徳（昭和22年特文卒業）宛の書簡。北京一高会通信を読んだ後、白緑蔭について補足情報を提供したもの。白の遺物に「哲学のために」という文字が書かれており、「学」が「子」に見えることから、失恋による自殺である、と一部のメディアが報じたが、多くの留学生はそうは思っていなかったという。鮑耀東は広東出身で、昭和14年（1939）に一高卒業後、九州帝国大学医学部に進学。昭和20年（1945）に帰国し、脳外科医として活躍した。

書簡（吉人鏡から林連徳宛て、2000年8月14日）

吉人鏡は1920年山西省翼城県生まれ、昭和17年（1942）に一高特設高等科理乙に入学。韓樹英、閻昌齢と同じクラスであり、のちに読書小組（中国共産党新知識研究会所属、組長姜紹呂）を発足させた。中華留日第一高等学校同学会（略称は「留日同学会」）文芸委員に選出されるも、1943年8月に姜の提案を受けて帰国、中国共産党に加入した。以降中学や工場などで勤務。本書簡は留日同学会の活動を回想し、一高の成立年について林連徳に尋ねたものである。

渡部武「忘れ得ぬ友垣」（『水路』25号）

渡部武（昭和18年文乙卒業）が「一高玉杯会便り」で発表した「周幼海のこと」（第169号、2018年9月9日）と「張華栄の思い出」（第171号、2018年10月2日）をまとめたエッセイ。同じア式蹴球（サッカー）部に所属し、寮の部屋もともにした特高生である周幼海と張華栄のことを回想している。周幼海は汪兆銘政権の要人・周仏海の息子で、「身のこなし足技に優れ、いずれ戦力になると期待された」が、一高を退学し帰国した。張華栄は台湾出身で、授業以外はよく渡部と一緒に行動していたという。

『昭和十八年度寮生名簿』

一高寄宿寮委員会が毎年度編集、発行した冊子。部屋ごとに寮生の科・組別、出身中学、原籍、現住所、電話番号が記される。在寮生のほか、通学生、職員一覧もある。名簿から寮部屋割の仕方や部活動（主に体育活動）の人員構成が分かり、特高生と本科生が共同生活を送った様子もうかがえる。

林義春『肺区域の選択的造影法とその応用』（医学書院、1977年（初版1958年））

林義春は大正15年（1926）に長崎市に生まれ、長崎華僑時中小学校で中国語を学ぶ。昭和18年（1943）、一高特理乙に入学したが、翌年夏から戦局激化により休学し母と上海へ渡った。上海同仁大学医学院に入学し、東二郎等に医学の手ほどきを受ける。敗戦後の上海では、日本人収容所等で日本人のために力を尽くした。一高への復学後、京都大学医学部に進学。父を肺病で亡くしたことから肺区域の研究を志した。いくつかの研究所・医院を経た後、大阪にて開業医として活躍した。

林義春「持つべきは「良き友」と私の一冊（道理の感覚）の著者」

（『同門会誌』第39号、2014年）

『同門会誌』は、林義春が学んだ京都大学医学部呼吸器外科の同窓誌。林の親友「森田保夫君」のエピソードと共に、一高合格にあたり過去問が入った「分厚い参考書」があったことが窺える。昭和19年母に泣きつかれて一高を休学し上海に渡るまでのいきさつを語る中に、「担任の藤木邦彦先生」に相談し進学について助言されたことが見える。

12. 写真で見る駒場と一高生活――特高生の過ごした場所

昭和 10 年（1935）9 月、一高は「向陵」と呼ばれていた本郷から駒場へと校地を移転した。大戦を挟んで昭和 25 年（1950）にその歴史を終えるまでの約 15 年間にわたる駒場での一高生活は、文字資料のみならず、数多くの古写真にも記録されている。護国旗を携えて駒場に移転する行軍、紀念祭や寮歌祭などの年中行事、寄宿寮の机で勉強し食堂に集う生徒たちの共同生活など、在りし日の一高の風景が克明に写しとられている。当時は倫理講堂と呼ばれていた 900 番教室や、図書館として利用されていた駒場博物館などの建築物も見ることができる。その中には、昭和 7 年（1932）、一高における中国人留学生のために設置された特設高等科の学び舎だった 101 号館も記録されている。新しい校舎と寄宿寮において一高の歴史が引き継がれ「新向陵」となっていった駒場のありさまを写真に認めることができるだろう。

このように駒場時代の一高生活を伝えるさまざまな写真が残されているのだが、しかし、特高生の姿形を示すものは多くない。残されているのは、昭和 11 年（1936）に在学していた特高生の集合写真などの記念写真が主であり、たとえば、専用教室で授業を受ける様子といった特高生たちの日常的な身振りを見ることはできない。日中関係が複雑化していく時局下において、日本人本科生と特高生のあいだに積極的な交流はなく、特高生を捉える写真の少なさは、当時の一高にとって留学生が周縁的な存在であったということを暗示していると考えることもできるだろう。とはいえ、戦中であれ特設高等科は存続しており、一高への留学生がいたことは事実である。本科生が一高生活を送っていたのと同じ駒場という場所で、特高生も日々を過ごしていたのである。

駒場の一高生活を記録する古写真に見ることのできる当時の風景には、姿こそ前景に現れてはいないが、特高生の存在の痕跡も記憶されているように思われる。

（小手川 将）

本館（現１号館）

本科生は、主に本館で授業を受けていた。生徒たちの記念写真の撮影や合格発表の掲示、さらには昭和19年（1944）の学徒勤労動員出発式が本館の入口前で行われた。当時から時計台の役割もあった。昭和18年（1943）には電力不足のために時計が止められたという記録がある。

倫理講堂（現900番教室）

授業や講演に使われる大教室で、昭和13年（1938）に行われた創立六十周年記念式典や、外部から演奏者を招く音楽会などの行事にも用いられた。一高では倫理教育が重視されており、講堂で倫理の授業を行っていたことから倫理講堂と呼ばれていた。

図書館（現駒場博物館）

書庫・閲覧室として使われていた。向かい側に位置する倫理講堂と外観が近似しており、正門を中心に対称的な構図をとっている。昭和20年（1945）、空襲が激化したために「図書館ノ図書ヲ地下道ニ移転スル予定」という記録が『寮務課日記』6月1日条に書かれている。

特設高等科教室（現101号館）

特設高等科の留学生たちのための教室として昭和11年（1936）に建てられた。授業を受けるための教室のほか、教官室や事務室などの運営機関や、特設高等科専用の図書室も入っていたという建物内部を記録した写真はほとんど残されていない。

寄宿寮

寄宿寮は生徒による自治で運営されており、いわゆる「一高」精神を代表する建物である。北寮、中寮、南寮、明寮と四棟あり、特高生を含む全ての生徒が寮で生活することが望ましいとされていたが、実際にはそうとは限らなかった（展示4「クラス別留学生一覧」参照）。寮内の庭では、新入生歓迎の目的もあった寮歌祭が行われた。寮の東側には食堂があった。

嚶鳴堂・寮務室

嚶鳴堂では、入寮式や寮委員議長選挙、さらには紀念祭で行われる寮生劇などのさまざまな行事が催された。嚶鳴堂に近接する寮務室では、寄宿寮の運営を行うために生徒が集まって定期的に委員会が開かれていた。

物理学教室・弥生道

特設高等科専用の物理学・化学・生物学・特別教室も併設されていた物理学教室は、昭和20年（1945）の東京空襲によって全焼した。弥生道とは銀杏並木の呼称で、昭和17年（1942）につくられた寮歌「弥生の道」には「弥生の道に風寒く／公孫樹の枯葉音もなく」という歌詞がある。

正門・一高前駅

昭和10年（1935）、一高が駒場に移転したことをきっかけに東駒場駅から一高前駅に改称された（現在の駒場東大前駅より東側にあった）。一高寮内規約の第十四項には、正門以外から校地に入ることを禁ずる文言が書かれており、生徒が垣根を越えて入構したことが発覚すると寮委員会によって罰則が課せられた。

資料編

年表　もうひとつの一高

年	（中国）	（日本）	月	一高に関する事項	（一般事項）
1874	同治 13	明治 7	12	東京外国学校から英語科を分離して東京英語学校設立	
1877	光緒 3	明治 10	4	東京英語学校と東京開成学校普通科と合併して東大予備門設立	
1886	光緒 12	明治 19	4	東大予備門、第一高等中学校に	
1888	光緒 14	明治 21		一高に基督教青年会できる	
1890	光緒 16	明治 23	2	木下広次校長、寄宿寮に自治制を許可	
1894	光緒 20	明治 27	8		日清戦争
			9	第一高等中学校、第一高等学校に	
1896	光緒 22	明治 29	6		清国政府派遣留日学生の嚆矢（高等師範学校へ 13 人）
1898	光緒 24	明治 31	5		* 張之洞『勧学篇』出版
			6		戊戌変法
			7	狩野亨吉、校長となる	
			12		京師大学堂開学。初代管学大臣孫家鼐
1899	光緒 25	明治 32	9	**清国留学生 8 名、聴講生として一高に入学**	
1902	光緒 28	明治 35	8		欽定学堂章程
1903	光緒 29	明治 36	2	狩野校長、会堂を「嚶鳴堂」と名付ける（『詩経』「小雅・伐木」より）	
			12	**京師大学堂派遣の清国官費留学生 31 名、一高入学（翌月南寮 1・2・3 番室に入寮）**	
			—		京師大学堂から西洋へは 16 名派遣
1904	光緒 30	明治 37	1	**寄宿寮総代会、清国留学生を「寮生として遇する」と議決**	
			—		奏定学堂章程
			2	**清国留学生への授業開始**	
			—		日露戦争
			3	**清国留学生、二年と三年部屋に 2 － 4 名ずつ分かれて入寮**	
			—	**腸チフス流行による寮の閉鎖で、清国留学生は「修学旅行」に出る。行先は、藤沢、江ノ島、鎌倉、横須賀方面**	
1905	光緒 31	明治 38	8		中国同盟会成立
			9		ポーツマス条約／科挙制度廃止へ
			11	**「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規程」**	
			12	陳天華、清国政府に抗議して大森海岸にて入水自殺	
1906	光緒 32	明治 39	9	新渡戸稲造校長となる	
				この年、一高三高対抗野球試合始まる	
1907	光緒 33	明治 40	8	**「五校特約」（注 1）結ばれる**	
1908	光緒 34	明治 41	4	**特設予科設置**	
1909	宣統 1	明治 42	3	**本科在学の外国人留学生の寮生は一般寮生と同等の選挙権を持つことに**	
			12	**清国留学生茶話会、校長始め学校幹部、清国公使館員、寮委員出席、以後毎年このころ開かれる**	
1910	宣統 2	明治 43	8		韓国併合
1911	宣統 3	明治 44	10		武昌起義（辛亥革命の起こり）
1912	民国 1	明治 45	1		中華民国成立
			5		京師大学堂、北京大学校に改称（初代校長厳復）

			6	校内に「朱舜水終焉地の碑」除幕式（日本永住 250 年記念）	
		大正元	11	**日華同学会発足（～ 1916.4）、第 1 回懇親会を根津娯楽園で開く**	
1914	民国 3	大正 3	7		第一次世界大戦
1915	民国 4	大正 4	1		対華二十一ヶ条要求
			—		* 蔡元培『哲学大綱』出版
			6	**中華留日第一高等学校学生同窓会結成**	
			9		* 陳独秀『青年雑誌』（のち『新青年』）を創刊
1917	民国 6	大正 6	1		* 胡適「文学改良芻議」発表
			2		* 陳独秀「文学革命論」発表
			5		* 魯迅「狂人日記」発表
1918	民国 7	大正 7	5	**日華学会設立（中国留学生の支援団体）**	
1919	民国 8	大正 8	4	**第二次「高等学校令」施行に伴い、特設予科の学科課程を改正**	
			5		五四運動
			6		ヴェルサイユ条約
			—		* 李大釗「我的馬克思主義観」発表
1923	民国 12	大正 12	3		対支文化事業発足
			9		関東大震災
1924	民国 13	大正 13	-		* 孫文「三民主義」講演、「国民政府建国大綱」発表
1925	民国 14	大正 14	5	一高同窓会、正式に発足	
			8	**特設予科規程を制定**	
1927	民国 16	昭和 2	4		南京国民政府成立
1928	民国 17	昭和 3	6		国民革命軍、北京入城。北伐完成
			12		張学良政権、南京国民政府に合流。全国が統一
1929	民国 18	昭和 4	7	**森巻吉、校長となる**	
1930	民国 19	昭和 5	3		* カール・マルクス『資本論』（中国語版）出版
1931	民国 20	昭和 6	9		満洲事変
1932	民国 21	昭和 7	1		上海事変
			3	**満洲事変後在籍留学生の動静を調査（帰国して帰校しない者、本科生 14 名中 4、予科生 29 名中 18）**	
			—		「満洲国」建国
			5	**特設予科廃止（1908 年以来、810 名修了）**	
			—	**特設高等科設置**	
			6	**藤木邦彦、講師となる**	
1933	民国 22	昭和 8	2		国際連盟総会が日本の満洲からの撤兵を求める決議を採択
			3		日本が国際連盟脱退
			5		塘沽停戦協定
1934	民国 23	昭和 9	4		天羽声明
			—	**特設高等科生と本科生との親睦のため「棣華会」発足**	
			12	**文部省、特設高等科卒業生を大学入学について高校高等科卒業者と看做す省令を制定**	
1935	民国 24	昭和 10	3	**特設高等科規程中の「支那」が「中華民国及満州国」に改められる**	
			—	**特設高等科教室（101 号館）一棟の引継ぎを受ける**	
			9	本郷から駒場へ移転	

			12	外務省により国際学友会設立	
			—		一二・九運動
				特高生間で九光会が組織され、抗日的書籍の読書会が実施される **この年、再び日本留学が隆盛期を迎え、留学生が 5000 名を超える**	
1936	民国 25	昭和 11	1	**特設高等科教室（101 号館）増築分の引継ぎを受ける（31 日完成）**	
			—		* 艾思奇『哲学講話』（のちに『大衆哲学』に改名）
			—		広田三原則
			6	**満洲国留日学生会発会式（このころ中国留学生などの諸連盟も組織される）**	
			10	**全寮晩餐会、特設高等科問題で議論さかん、特高生の所信表明**	
			12		西安事件
1937	民国 26	昭和 12	4	**特設高等科寄宿舎（明寮）の引継ぎを受ける（16 日完成）**	
			—	橋田邦彦、校長となる	
			7	**特設高等科附属予科設置（9 月より授業開始）**	
			—		盧溝橋事件（七七事変）
			9	**寮委員に特設高等科生 1 名が加わるように**	
			—	**盧溝橋事件により、特高生 58 人中 39 人欠席、うち「満洲国」留学生 36 人中 13 人欠席**	
			11		国民政府、武漢を経て重慶へ
			12		* スターリン『列寧主義概論（レーニン主義概論）』（中国語版）出版
			—		南京事件
1938	民国 27	昭和 13	2	寄宿寮紀念祭を式典だけとし、その他の全費用を国防費として献金することが決定	
			—		* エドガー・スノー『西行漫記（中国の赤い星）』（中国語版）出版
			4		「国家総動員法」
			5	**特設高等科寄宿舎（明寮）増築分の引継ぎを受ける**	
			7	初めて学校集団勤労作業を実施（9 日）	
			—	同窓会館竣工（25 日）	
			9	来日中のヒトラーユーゲント一行のうち 15 名、一高を訪問。交歓会開催（20 日）	
			11	創立六十周年記念式典（1 日）	
			12		汪兆銘（精衛）が重慶を離れる
1939	民国 28	昭和 14	3	藤木邦彦、教授となる	
			—	『第一高等学校六十年史』刊行	
			5		ノモンハン事件
			9		ドイツのポーランド侵攻
				特設高等科内に中国国民党の地下組織形成	
1940	民国 29	昭和 15	3		汪兆銘政権成立
			9	安倍能成、校長となる	日独伊三国軍事同盟
				特設高等科内に中国共産党の地下組織形成	
1941	民国 30	昭和 16	3	校友会を護国会と改称、護国会規則を制定	
			4	新入生に週 3 回ずつ全般的修練実施	
			—		日ソ中立条約締結
			7		南部仏印進駐
			8	文部省、各学校に学校報国隊（団）編成を訓令。一高に報国隊を組織、実地演習を実施	

			12	「留日学生指導方針（案）」審議（注 2）	真珠湾攻撃・重慶政府が日独伊へ宣戦布告。太平洋戦争
1942	民国 31	昭和 17	2	**憲兵来校、中国国民党の地下組織に参加した特高生 4 名を拘引**	
			6	**特高生、10 日間埼玉県下で勤労作業**	
			—		ミッドウェー海戦
1943	民国 32	昭和 18	1	高等学校令改正（修業年限を 2 年に短縮）	
			4	文部省、高等学校長会議で野球・庭球・卓球などの廃止、対抗試合は訓育に効果的と認める場合のみ許可などの方針を言明（17 日）	
			—	**棣華会コンパ（27 日）**	
			5	**山下政治生徒主事引率による特高生修学旅行。行先は奈良、京都、松本など**	
			8	**五味智英教授、特高文一生と懇談。民族問題及宗教の問題が中心（27 日）**	
			9	**藤木邦彦、留学生課長となる**	
			—	**「留日学生ノ処遇ニ関スル件」閣議決定（10 日）**	
			—	構内勤労作業開始（除草、防空壕堀）（10 日）	
			—	文部省、学徒体育大会を全面禁止	
			—	**特高科生徒、日高第四郎特設高等科長、藤木留学生課長歓迎会を開く（25 日）**	
			10	**満洲国留日学生会運動会。藤木、津田栄修練部長・生徒主事出席（3 日）**	
			—	明治神宮外苑競技場にて学徒出陣壮行会（21 日）	
			—	**藤木、特高生 38 名を引率し、上野科学博物館を見学（27 日）**	
			—	**藤木、特高生 41 名を引率し、毎日新聞社、毎日天文館を見学（28 日）**	
			—	**藤木、特高生 40 名を引率し、帝室博物館を見学（30 日）**	
			12	**第二学期授業終了。柏蔭舎にて委員と特高生との座談会。日高第四郎教頭、柳田友輔体錬課長、藤木出席（20 日）**	
			—		カイロ宣言
1944	民国 33	昭和 19	1	藤木邦彦、生徒主事を兼任する	
			—	特設高等科教室（101 号館）を利用して整暇寮を開設、結核要注意者を収容（17 日）	
			2	**嚶鳴堂にて第二回文化祭祝典。寮生劇の催しで、特高同学会が「藤野先生」、「中華広東音楽」を披露。田辺元が「文化の限界」講演（1-2 日）**	
			—	**麹町区の女子学院にて故三谷隆正告別式（20 日）**	
			3	「決戦非常措置要綱に基づく学徒動員実施要項」閣議決定（7 日）	
			—	**総合留学生入学試験。日本語・日本史、数学、物象。口頭試験、身体検査。口頭試問（16-18 日）**	
			4	**特設高等科新入寮生訓練講習会開講式挙行。藤木の指導下で同窓会館に全宿（1 日）**	
			—	入寮式挙行（6 日）	
			—		大陸打通作戦
			5	**憲兵隊来寮、特高生 2 名を取調べの上、所持品の一部と共に両名を連行（24 日）**	
			—	藤木、「歴史ニ就テ」講演（27 日）	
			6	同窓会館にて特設予科創立十二周年記念コンパ。藤木、津田栄、酒井善孝、岡部建蔵、川口篤教授ら出席（1 日）	
			—	**運動場にて一年生と特高一、二、三年生、翌日からの埼玉県下勤労作業隊を編成（19 日）**	
			—	**特高生、埼玉県で 10 日間勤労作業**	
			7	嚶鳴堂にて第五十五回紀念祭挙行。戦没先輩 40 数名の慰霊祭（7 日）	
			—	**一年生、特高一、二年生、予科生、校内作業に従事（21 日）**	
			—	これより当分の間、短縮授業（24 日）	

			7	寄宿寮改革実施。幹事制発足、総代会廃止	
			—		サイパン島陥落
			8	寄宿寮各寮に寮主任として教授を任命（6 日）	
			—	「学徒動員令」公布（23 日）	
			12	陸軍省兵務局長、寄宿寮を視察	
1945	民国 34	昭和 20	1	午前 5 時頃 1 機来襲。被害軽微。宿直は藤木が担当（1 日）	
			—	平常通りに授業挙行（5 日）	
			—	午前 2 時 10 分頃、約 70 機編隊が来襲。一高校庭にも B29 の機関銃薬莢多数落下（27 日）	
			2	第五十六回紀念祭挙行。（講演、寮生劇（嚶鳴堂）、音楽祭（倫理講堂）、寮歌祭）（1-2 日）	
			—	**一高事務室が特高館（101 号館）に入る**	
			—	**「留日学生教育非常措置要綱」（注 3）**	
			—		ヤルタ宣言
			3	**留学生総合入学試験（27-28 日）**	
			4		アメリカ軍、沖縄上陸
			—	無聲堂にて新入生の入寮式（29 日）	
			5	「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」奉読式挙行（22 日）	
			—	一高敷地内に多数の焼夷弾落下、生物、物理、化学の諸教室、御殿等を焼失。藤木含め教職員の羅災者多数（25-26 日）	
			—	生徒は焼跡の片付けに奮闘（27 日）	
			—	授業開始（28 日）	
			6	**特設高等科物理学・化学・生物学特別教室焼失につき寮へ教室を移転（1 日）**	
			—	**川口篤教授、特高生疎開地調査のため山形へ出張（7 日）**	
			7	**新入生歓迎、勤労に出動する理甲送別、山形へ疎開する特高生送別を兼ね、晩餐会（21 日）**	
			—	文化祭に代えて音楽会、講演会、研究会、向陵美術展（22 日）	
			8	**特高生疎開（28 名、山形県蔵王高湯温泉、2 か月後帰校）**	
			—		終戦
			—	一高、戦後初めての授業開始 (28 日。27 日との記録も)	
			—	勤労作業の生徒、次々に帰校。臨時時間割による授業を行う（31 日）	
			9	午前中 3 単位の授業および体操、午後作業の日課定まる（3 日）	
			—	晩餐会。この頃、進駐軍が校舎、寄宿寮を検分に来る（9 日）	
			—		中国戦区の日本軍が正式に降伏
			10		「双十」協定
			—		日本による台湾統治終了
			11	**中華民国留日学生東京同学会発足（26 日）**	
			12	**全寮晩餐会（1 日）。特高生も特高警察に対する怒りの心情を吐露**	
1946	民国 35	昭和 21	2	天野貞祐、校長となる	
			—	高等学校修業年限を 3 年に復する	
			3	食糧事情により休校（6 月まで）	
			5	中華民国留日学生東京同学会から中華民国留日同学総会へ発展的改組（22 日）	
			6	寮内規約改正。正門主義の廃止など	
			7		国共内戦開始
			9	入学式、入寮式（9-10 日）。全寮制復活	
1947	民国 36	昭和 22	2	全寮晩餐会（1 日）	
			—	第五十八回紀念祭式典（2 日）	
			—		二・二八事件

1948	民国 37	昭和 23	2	天野貞祐、東大の一高合併に反対、辞職。後任校長は麻生磯次	
			3	一高最後の入学試験、入学者 376 人	
			5		台湾で戒厳令
			9		三大戦役
				この年、対三高戦終わる	
1949	民国 38	昭和 24	1		人民解放軍、北平入城
			5	一高を中心に東京大学教養学部を設置	
			6	一高、東京大学第一高等学校となる（注 4）	
			—	藤木邦彦、東京大学教養学部教授となる	
			10		中華人民共和国成立
			12		国民政府、台北へ遷都
1950	（民国 39）	昭和 25	3	一高倫理講堂で卒業式。歴代校長が出席。麻生校長の手により「第一高等学校」の門札を撤去	
1951	（民国 40）	昭和 26	3	**旧制一高最終回生 406 名、本年一高卒業相当のかたちとなる（うち特設高等科文科 10 名、理科 13 名）**	

太字：一高留学生関係

—：上の月に同じ

（注 1）清朝政府と日本文部省との間で結ばれた教育委託協定。毎年、一高や東京高等師範学校など 5 つの学校に合計 165 名の官費留学生が清国から派遣される取り決めで、一高には 65 名が割り当てられた。清朝滅亡後も中華民国によって受け継がれた。

（注 2）文部省中心の関係省庁による「外国人留学生に関する連絡協議会」で策定された留学生教育の指針。日本の「理想」を体得した留学生を各国の指導的立場におこうとした当時の政府の思惑を示している。

（注 3）「集合教育」の内容を規定した閣議決定。集合教育は留学生の実質的な疎開であると同時に、留学生の管理政策でもあった。

（注 4）1949 年 5 月 31 日に東京大学に教養学部が設置され、駒場キャンパスの正門に門札が掲げられる。 6 月 30 日、一高は東京大学と合流し、「東京大学第一高等学校」となる。 7 月 1 日には、新制東京大学の入学式があり、旧制、新制の学制が 1950 年 3 月の一高閉校まで並存することとなる。

※第一高等学校編『第一高等学校六十年史』（第一高等学校、1939 年）、『第一高等学校一覧 昭和 18-19 年』（第一高等学校、1944 年）、藤木邦彦『加茂藤成記』（1968 年 -1993 年まで作成）、西沢佶編集代表『写真図説 嗚呼玉杯に花うけて 第一高等学校八十年史』（講談社、1972 年）、藤木邦彦編「第一高等学校年表」（『向陵』一高百年記念号、一高同窓会、1974 年）、『史聚』第 28 号（史聚会、1993 年）、一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校自治寮六十年史年表』（一高同窓会、1994 年）、日本華僑華人研究会、陳焜汪編『日本華僑・留学生運動史』（中華書店、2004 年）、『北京一高会通訊 1995-2005 合訂本』（北京一高会、2006 年）、川島真他編『東アジア国際政治史』（名古屋大学出版会、2011 年）、国分良成他『日中関係史』（有斐閣、2013 年）の他、駒場博物館蔵の『訓務掛日誌 』（昭和 18 年 7 月 -12 月）、『 教官宿直日誌 』（昭和 18 年 -19 年）、『 寮務課日記 』（昭和 19 年）、『 寮務課日記 』（昭和 20 年 1 月）より作成。

（作成者：高原智史、宋舒揚、横山雄大、宇野瑞木）

藤木邦彦略年譜

1907年5月3日	（0 歳）	熊本市にて出生
1914年4月1日	（6 歳）	熊本市立慶徳小学校入学
1919年4月1日	（11歳）	東京市立青南小学校転学
1920年4月1日	（12歳）	東京府立第一中学校入学
1924年4月1日	（16歳）	第一高等学校文科甲類入学
1927年4月1日	（19歳）	東京帝国大学文学部国史学科入学
1930年4月1日	（22歳）	東京帝国大学大学院入学
4月1日		東京帝国大学文学部副手
1932年3月31日	（24歳）	大学院修了、副手退職
6月2日		第一高等学校講師
6月2日		特設高等科生に対する日本史講義担当
1933年4月1日	（25歳）	立正大学講師兼任
1935年1月1日	（27歳）	中央大学法学部講師兼任
1936年9月30日	（28歳）	一高六十年史編纂事務嘱託
1937年8月31日	（29歳）	一高特設高等科附属予科講師嘱託
1939年3月31日	（31歳）	第一高等学校教授
1943年	（35歳）	国際学友会講師
		（中国、東南アジア諸国留学生に日本史講義）
1943年9月		第一高等学校留学生課長
1944年1月17日	（36歳）	第一高等学校生徒主事兼任
1945年8月	（37歳）	第一高等学校 生徒主事退任
1949年6月30日	（42歳）	東京大学教養学部教授
1965年4月1日	（58歳）	東洋大学講師兼任
1968年3月31日	（60歳）	東京大学定年退官
4月1日		国士舘大学教授、女子美術大学講師兼任
5月23日		東京大学名誉教授
1978年4月1日	（70歳）	国士館大学文学部国史学科主任
1980年4月1日	（73歳）	国士館大学文学部特任教授
1983年3月31日	（76歳）	国士舘大学退職
4月1日		国士舘大学特別客員教授
8月20日		新宿区教育委員会文化財保護審議会委員
1986年4月1日	（79歳）	国士館大学客員教授
1987年3月31日	（80歳）	国士館大学客員教授辞任
8月19日		新宿区教育委員会文化財保護審議会委員辞任
1988年3月31日	（81歳）	女子美術大学講師辞任
1993年5月6日	（86歳）	死去

単著

『平安朝文化史論』（東洋協会出版部 、1948 年）
『日本史』（ 世界書院 、1950 年）
『日本のあゆみ』4 冊（偕成社 、1957 年）
『日本全史』三（古代 II、東京大学出版会 、1960 年）
『平安時代の貴族の生活』（至文堂 、1960 年）
『平安時代の文化』（日本教文社 、1965 年）
『平安王朝の政治と制度』（吉川弘文館、1991 年）

編著（一部）

『第一高等学校六十年史』（共編 第一高等学校 、1939 年）
『日本史 資料演習 』（共編 東京大学出版会 、1956 年）
『日本史（大学教養演習講座)』（青林書院 、1959 年）
『新撰日本史資料集』（共編 山川出版社、1959 年）
『日本人名小辞典』（学生社、1961 年）
『日本史概説 』（共編 東京大学出版会 、1961 年）
『日本史 』（教科書 秀英出版 、1968 年）
『詳説日本史 』（教科書 山川出版社 、1960 年）

論文（一部）

「上代における家吏制の問題」（『歴史教育』1931 年）
「平安朝権勢家の家吏について」（『地理歴史研究』1933 年）
「北政所考」（『立正史学』1936 年）
「鎌倉時代の書風について」（『書道研究』1939 年）
「東京英語学校について」（『歴史教育 』1940 年）
「北政所について」（『東大人文科学科紀要』1955 年）
「陣定について――平安時代における政勢執行の一形態」
（『東大人文科学科紀要』1961 年）
「平安後期の社会と文学 」
（『国文学 解釈と教材の研究』1965 年）
「星空を観る」（『日本歴史』1980 年）

部分執筆（一部）

『第一高等学校八十年史 』（ 講談社 、1972 年）

＊一高史談会顧問、柔道部長、野球部長

（『史聚』1993 年 11 月の年譜等、及び『加茂藤成記』により作成 。 作成者：高原智史・宇野瑞木）

特設高等科生出身校一覧（1943年名簿より）

科類	原籍	年齢	出身校	卒 / 修	日本
文三	満：間島	22	間島光明中卒	卒	
	中：福建	22	台湾長栄中卒	卒	
	中：福建	22	京都同志社中卒	卒	○
	中：福建	21	東京立教中卒	卒	○
	中：広西	25	南京模範中卒	卒	
	満：関東州	21	大連中四修	修	
	満：奉天	25	奉天一工科高中卒	卒	
	満：関東州	22	大連二中四修	修	
	満：錦州	22	奉天南満中四修	修	
	中：広東	21	上海聖約翰高中卒	卒	
	中：河北	25	北京市五中卒 / 北京大文学一年修	卒	
	中：河北	23	北京四高中卒	卒	
	満：吉林	24	長春二中卒 / 吉林師範卒	卒	
	中：江蘇	23	江蘇無錫中卒	卒	
	満：奉天	25	東京国士館中四年修	修	○
理甲三	中：浙江	21	大連中卒	卒	
	中：察哈尓（チャハル）	26	河北省立高級中卒 / 南京教員養成所修	卒	
	中：江蘇	23	上海大同大学附中卒	卒	
	中：河北	25	北京市三中卒 / 北京市師範卒	卒	
	満：吉林	26	奉天南満中卒	卒	
	満：間島	24	間島延吉国民高校卒	卒	
	満：錦州	25	奉天文会高級中卒	卒	
	中：山西	25	太原高中修 / 鹿児島市来農修	修	○
	中：山東	25	青島学院商卒	卒	
理乙三	中：河北	21	北京匯文中卒	卒	
	満：奉天	22	奉天南満中四修	修	
	中：江蘇	24	江蘇蘇州中卒 / 上海交通大一修	卒	
	満：関東州	23	広島高師附中卒	卒	
	中：河北	23	河北天津高中卒	卒	
	中：河北	24	天津中日高中卒	卒	
	中：河北	22	河北北京高中卒	卒	
文二	中：福建	19	台湾長栄中修	修	
	満：間島	21	高田師範一部四年修	修	○
	中：福建	21	国民中卒	修	
	満：関東州	22	奉天南満中修	修	
	満：奉天	22	新京二国高卒	卒	
	満：奉天	24	奉天七国高卒	卒	
	満：奉天	24	奉天七国高卒	卒	
	満：吉林	25	東京大成中卒	卒	○
	満：関東州	23	大連中四年修	修	
理二	中：河北	22	天津中日高中卒	卒	
	中：河北	23	河北保定師範卒	卒	
	中：山西	27	山西太谷県銘賢高中卒	卒	
	中：広東	19	横浜一中卒	卒	○
	中：山東	26	上海正始高中卒 / 上海交通大卒	卒	
	中：山西	25	河北那台中卒	卒	

	中：河北	21	北京定一中修	修	
	中：河北	24	北京育英中卒 / 北京大理学院一修	卒	
	満：奉天	20	鉄嶺国高卒	卒	
	中：河北	21	河北保定師範卒	卒	
	満：関東州	19	大連二中四修	修	
	中：江蘇	21	神戸神港中卒	卒	○
	満：安東	21	安東三国東卒	卒	
	中：江蘇	24	上海楽群中卒 / 上海復旦大二修	卒	
	満：牡丹江	21	哈尔賓二国高卒	卒	
	満：関東州	22	大連中四年修	修	
	中：山東	23	山口鴻城中四修	修	○
	中：蒙疆	25	奉天同文高卒 / 善隣高商予修	卒	
	満：関東州	23	奉天南満中修	修	
	満：奉天	24	新潟高田師本科四年修	修	○
	満：間島	23	間島光明中卒	卒	
	中：広東	21	上海中卒	卒	
	満：関東州	26	大連商卒	卒	
	中：江蘇	23	松江応化中卒 / 上海医学院中退	卒	
文一	中：広東	23	広東知用高中卒	卒	
	中：河北	18	関西学院中卒	卒	○
	満：奉天	24	浦和中卒	卒	○
	満：奉天	22	奉天五国高卒	卒	
	満：興安東	22	新潟師一部四修	修	○
	中：湖南	21	香港金陵中修	修	
	中：河北	18	東京杉並中卒	卒	○
	中：蒙疆	22	山西大同中卒	卒	
	満：関東州	25	福島磐城中卒	卒	○
	中：広東	20	北京興亜中卒	卒	
	中：河北	19	昌黎県立中卒	卒	
	満：奉天	20	奉天南満中卒	卒	
	満：興安南	19	札蘭屯国高卒	卒	
	中：河北	19	大阪市岡中卒	卒	○
	満：錦州	22	奉天文会中卒	卒	
	満：関東州	24	奉天南満中修	修	
	満：関東州	21	大連中四修	修	
	中：福建	23	台湾長栄中卒	卒	
理甲一	満：関東州	20	大連市立律協和実業卒	卒	
	中：貴州	21	北京大学附属中卒	卒	
	満：安東	20	安東国高卒	卒	
	中：江蘇	21	上海暁光中卒	卒	
	中：福建	21	台湾長栄中卒	卒	
	中：河北	22	北京大中中卒	卒	
	満：奉天	23	徳島中四修	修	○
	満：関東州	19	旅順高公中学部卒	卒	
	中：河北	21	天津市一中卒	卒	
	中：貴州	22	北京匯文中卒	卒	
	満：錦州	20	奉天南中修	修	
	満：関東州	19	大連二中四修	修	
	中：河北	21	北京市四中卒	卒	

理乙一	中：山西	25	山西寧武中卒	卒	
	中：浙江	21	北京市二中卒	卒	
	中：河北	19	天理二中四修	修	○
	中：山東	24	北京大中中卒	卒	
	満：奉天	19	奉天南満中卒	卒	
	中：山西	24	北京師大附属中卒	卒	
	満：奉天	22	奉天南満中卒	卒	
	満：新京	18	奉天南満中卒	卒	
	満：関東州	22	奉天南満中卒	卒	
	中：広東	20	香港華仁中卒	卒	
	中：福建	20	北京四存中卒	卒	
	中：河北	23	北京育英中卒 / 北京大理学院一修	卒	
予	中：浙江	21	浙江杭州中卒	卒	
	満：奉天	22	奉天南満中卒	卒	
	満：関東州	22	旅順高公中卒	卒	
	満：濱江	21	南満中四修	修	

原籍の「満」、「中」の区分は資料上の分け方。

（昭和十八年四月特設高等科及附属予科生徒名簿（藤木文書 3-1）により作成。作成者：高原智史）

藤木文書　書簡一覧

	藤木文書		投函年	投函日（書面日付）	差出人	差出人住所	主内容	宛名（ママ）	備考（日時、投函地等につき）
	8	49	1944	4月2日	薛来運	（満洲国奉天省）奉天市大西区	内地旅行制限による上京遅延の報告	第一高等学校留学生課長藤木邦彦様	
	18	25	1944	6月6日	林景東	杉並区荻窪	大学入試につき相談のため面会願い	藤木邦彦先生	駐日学務専員弁事処は1944年2月9日に杉並区荻窪町に移転、藤木宅宛
	18	16	1944	6月19日	馬民公	（満洲国錦州省）錦州市	休学につき相談	第一高等学校生徒主事室鈴木明先生	「康徳11年」
※	18	15	1944	〓月23日	特博信瓦齊爾	（国内）	警察署から証明書収受の報	藤木先生	19/07/15-19/10/15 で旅行許可願あり。
※	18	23	1944		特博信瓦齊爾		入営延期・「病欠」願	（備考参照）	19/07/15-19/10/15 で旅行許可願あり。手紙末尾に「藤木教授様」
※	18	26	1944	6月27日	李玉田	埼玉県大黒郡	勤労奉仕の現状報告	第一高等学校学生主事　藤木邦彦先生	
※	18	27	1944	6月27日	許準	埼玉県大黒郡	勤労奉仕の現状報告	第一高等学校生徒主事室藤木留学生課長尊下	
※	8	73	1944		連纕	（明寮七番）	葬儀参列のため帰省	（備考参照）	名刺同封との記載。手紙冒頭で「藤木先生　再三先生を留学生課にお窺ひせしも…」とある。
※	18	10	1944	7月5日	愛新覚羅憲容		8-73に同じ	藤木先生　机下	名刺
	18	14	1944		兪慶一		帰省準備完了の報	藤木留学生課長殿	封筒に切手等なし。「二学期より一層学業に励みます」「酷暑の折」とある。昭和19年7月20日～9月1日の旅行許可願あり。
	18	28	1944	7月18日	鮑尓焱	神保町	水虫化膿で入院・無断欠席につき詫び	第一高等学校留学生科（ママ）長　藤木先生	
	8	71	1944	8月16日	劉毅		父親の病気につき天津への帰省願い	（備考参照）	「帰省願」とある。文書末尾に「留学生課主任殿」とある
	18	17	1944		黄金生		休学許可書収受および療養経過の報	（備考参照）	19/8/13-19/103で旅行許可願あり。手紙末尾に「藤木邦彦先生」
	15	29	1944	8月31日	呉煥棟	京都	大学進学の挨拶	（備考参照）	19/8/22-19/9/15　東京京都間の旅行許可願あり。手紙末尾に「藤木先生殿」とある。
	15	28	1944	9月1日	馮喜檳	奉天市朝日区	帰着の報、在学証明書願	（備考参照）	19/8/10-10/10　東京奉天間の旅行許可願あり。手紙末尾に「藤木先生殿」とある。
	8	70	1944	9月11日			慢性気管支炎につき療養中の報告	（備考参照）	手紙末尾に「第一高等学校長　安倍能成殿」とある。
	8	72	1944	9月15日	黄必麟	台南市	治療経過・入院の報告	（備考参照）	封筒なし。宛名なし。黄の親からの手紙
	18	18	1944	9月18日	齊繁	（満洲？）	学資不足により帰校困難の相談	（備考参照）	手紙末尾に「藤木先生殿」とある。
	18	20	1944	9月21日	呉煥棟		省提出用の成績証明書照会	（備考参照）	手紙末尾に「藤木先生御座右」とある。
	18	24	1944	10月3日	柳文壇		母の病気につき、もう一ヶ月の欠席願い	（備考参照）	「満洲は今涼しくなってきました」とある。手紙末尾に「藤木先生様」とある。
	18	12	1944	10月19日	李徳純	（満洲国奉天省）奉天市大和区	治療経過の報告	第一高等学校　留学生課長藤木邦彦殿	手紙末尾に「藤木教授様」とある。
	18	19	1944	10月24日	鄭南金		卒業証書を代理人に渡してほしい	（備考参照）	手紙末尾に「藤木邦彦一高生徒主事殿」とある。
	8	65	1944	10月27日	白林之	中華民国山西省太谷県	葬儀等家事につき帰国遅延の報	第一高等学校（日本人）留学生主事　藤木先生	
※	8	57	1944	11月16日	石青山	（現・山西省朔城区）朔県	家族看病につき休学願い	第一高等学校留学生課御中藤木先生殿	「民国33年」
	18	21	1944		修忠		病気につき休学願い	（備考参照）	「チチハル市立病院に入院」との記述。手紙末尾に「藤木先生へ」とある。
	8	58	1944	11月21日	修忠	満洲国チチハル市	病気療養の経過報告および来春復学予定の報告	第一高等学校　藤木邦彦殿	「康徳11年」

	18	13		11月21日	魯徳恒	関東州旅順市	無事帰宅の報と無断帰国のお詫び	第一高等学校生徒主事室内藤木先生殿	
	8	56	1944	12月12日	孫盛武	大連市	気管支炎による長期療養につき休学願い	第一高等学校留学生課生徒主事　藤木邦彦殿	
	8	69	1945	3月4日	段世銘	大連市	大連着の報	（備考参照）	20/2/22-4/22で旅行許可願あり。手紙末尾に「藤木留学生課長先生へ」とある。
	8	63	1945	3月21日	柳文壇	満洲国吉林省磐石県	家族看病および自身の病ゆえ、退学あるいは休学願い	第一高等学校留学生課　藤木邦彦先生様	
	8	61	1945	3月25日	段世銘	大連市	4月1日からの学徒動員の報道につき、留学生も動員されるのか否かのお尋ね	留学生課　藤木邦彦様	昭和20年4月の授業原則停止措置のことか
	8	47		3月30日	王大中	宮城県仙台市花京院通 満洲留学生輔導協会	転進学先授業開始の知らせ、「疎開の留学生」と有り	第一高等学校　藤木邦彦先生	1935年9月に設立された満洲国留日学生会館が1944年3月7日に「財団法人満洲国留日学生会輔導協会」と改称
	8	59	1945	4月2日	段世銘	大連市	各種証明書発行依頼	第一高等学校　留学生課藤木邦彦様	旅順医専か奉天医大予科への転校希望（呂志乾・佟以林（旅高）発）
	8	62	1945	4月2日	王承維	奉天市小西区	病気療養につき休学延長願い	第一高等学校　藤木生徒主事殿	「康徳12年」
※	8	53	1945	4月5日	陳来峰	京都市左京区	進学先の京都帝大からの挨拶	一高留学生課　藤木邦彦先生	
	8	55	1945	4月13日	畢竟仁・楊士奇	札幌市北四條西	北海道帝大到着の挨拶、大東亜省官費生合格（大学入学許可）の報	第一高等学校留学生課　藤木邦彦殿	1945年5月1日、札幌や高松に日華協会による学寮新設
※	8	74		4月13日以降、4月中	林自由	大森区久ヶ原町	空襲被害につき、長期欠席願い	（備考参照）	「十三日夜の空襲により大塚の家は焼けました」との記述。手紙末尾に「藤木先生」とある。
	8	51	1945	4月23日	佐藤三郎	山形市　山形高校	受入予定留学生到着未着の報告	第一高等学校留学生課　藤木邦彦先生	特高生は山形県に疎開、移動の経費も日華協会が補助
	8	48	1945	〓日30日	鳥如喜業勤図		仙台進学先からの状況報告、卒業証書発行願	第一高等学校留学生課　藤木邦彦先生	
※	8	60	1945	5月1日	劉宗翼	福島県白河町	戦況悪化で京大入学準備不可の報	第一高等学校留学生課長藤木邦彦先生	
※	18	11	1945	5月16日	楊永清	神戸市葺合区野崎通り	病気治癒につき帰校予定の報	第一高等学校内　留学生係殿	封筒の差出人は「楊永清」だが、手紙は母・君江によるもの
	8	68	1945	5月19日	林文昭	東京都大森区久ヶ原町	（備考参照）	第一高等学校　藤木先生	封筒のみ
	8	66	1945	5月30日	陶忠義	高松市	家族看病のため登校不可能の報	第一高等学校留学生課　藤木邦彦先生	スタンプの年が不明瞭
	8	50		5月31日	木村健康	岡山市	六高視察の報告	第一高等学校　修練部執（？）官室内　藤木邦彦様	昭和18-19、修練部体錬課研修課長：木村健康、岡山の絵葉書
	8	52		3月31日	崔士彦	弘前市中土手町	疎開先の弘前前からの現状報告と挨拶	一高南寮留学生課　藤木邦彦先生	津軽のりんごの絵葉書
※	8	54		8月6日	阮春瑩	大阪府北河内郡寝屋川町	着阪の報告およびその遅延のお詫び	第一高等学校内　藤木邦彦先生	「越南人」。三高に転校か。夏休みに上京予定が「昨今の日に迫る情勢下」で夏休み返上となったと記されている。
	8	64			季玉田	仙台市	瀋玉生への卒業証明書発行願い	第一高等学校留学生課　藤木邦彦先生	瀋玉生の書簡を李玉田が転送
	8	67		4月16日	（于長久）	弘前市　弘前高校	弘前到着の報、在学中の感謝	第一高等学校留学生課　藤木邦彦様	
	18	9		7月23日	阿木古郎		徴兵検査につき帰国予定の報	藤木先生	封筒に切手等なし
	18	22			張在一		進学予定先長崎医大からの連絡待ち、状況報告	（備考参照）	病気療養につき帰省中との記述。昭和19年9月11日時点では九州帝大医学部への進学を希望。手紙末尾に「藤木先生様」とある。

※：本展示で展示しているもの

（作成者：日隈脩一郎）

展示品目録

（展示「もうひとつの一高」）

展示 No.		展示物	出典	所蔵先	成立年	作成者（寄贈者）	請求記号	
1	1	「かつての善隣友好の場――東京大学教養学部本部」	『教養学部報』28 号	駒場図書館	1954 年 2 月	藤木邦彦	3 階縮刷版	＊
	2	「藤木邦彦ニ日本史講師嘱託ノ件」	『昭和六、七年 職員進退』	駒場博物館	1931-32 年	第一高等学校	博 :(2) Ⅱ -52	
	3	「藤木邦彦先生を偲ぶ」	『歴史と地理　日本史の研究』161 号		1969 年 2 月	鳥海靖		＊
	4	「ビートルズとリンゴ箱の机――父の思い出」	『史聚』41 号（「特集・藤木邦彦先生の想い出」）	個人蔵	2008 年 3 月	藤木成彦		
	5	『日本史』の校正原稿		駒場博物館	1950 年以前	藤木邦彦	藤 :12-1 ～ 4	
	6	『日本史』（世界書院）		駒場図書館	1950 年	藤木邦彦	「一高文庫」三 : い :781	
	7	『詳説日本史』（山川出版社）		個人蔵	1967 年	藤木邦彦・宝月圭吾		
	8	『平安時代の貴族の生活』（至文堂）		個人蔵	1960 年	藤木邦彦		
	9	『加茂藤成記』		藤木成彦氏蔵	1968 年 -74 年頃	藤木邦彦		＊
2	1	「職員（昭和十八年九月一日現在）」	『第一高等学校一覧』（1943-44 年、83 頁）	駒場博物館	1943 – 44 年	第一高等学校	博 :(7)A1-4-10	
	2	『訓務掛日誌』昭和 18 年 9 月 25 日（土）条		駒場博物館	1943 年	第一高等学校	博 :(7)A-7-2-6-2	
	3	「本校特設高等科貴（館）見学御依頼ノ件」草案		駒場博物館	1943 年 10 月作成	第一高等学校	藤 :7-11-1,2	
	4	「中国からの留学生」	向陵誌刊行委員会編『向陵誌』駒場篇	駒場博物館	1984 年	一高同窓会	博 :(7)B-6-17-3	
	5	『組別時間割綴』（N o.16）		駒場博物館	1945-49 年	第一高等学校	博 :(3)F-15	
3	1	「昭和十七年度特設高等科入学志願者出身校調」		駒場博物館	1942 年	第一高等学校	藤 :2-2	
	2	「昭和十七年度特設高等科附属予科入学試験志望者心得発送名簿」		駒場博物館	1942 年	第一高等学校	藤 :2-4	
	3	昭和二十年度留日学生総合入学試験による入学生徒一覧		駒場博物館	1945 年	文部省専門教育局長	藤 :8-13-3	
	4	特設高等科及び附属予科募集要項		駒場博物館	1942 年	第一高等学校	藤 :15-10	
	5	「身分ニ関スル届書」		駒場博物館	1943 年	胡暢	藤 :18-29	
	6	「昭和十八年度　特設高等科入学試験問題」		駒場博物館	1943 年	第一高等学校	博 :(3)L51	
	7	「昭和十九年卒業予定」		駒場博物館	1944 年	第一高等学校	藤 :8-4	
	8	「第一次大学入学志願者名票」		駒場博物館	1944 年	第一高等学校	藤 :8-5	
4	1	「第一高等学校護国会規則（改正試案 十八年六月）」		駒場博物館	1943 年	第一高等学校	藤 :9-1	
	2	「特設高等科三年生（「満洲国」留学生）修学旅行報告」		駒場博物館	1943 年	第一高等学校	藤 :7-13(1)	
	3	「昭和十八年度第一学年生徒基礎鍛錬 一期日程表」		駒場博物館	1943 年	第一高等学校	藤 :9-22	
	4	「体力章検定成績（昭和十七年度）」（『訓務部報』1942 年 11 月）		駒場博物館	1942 年	第一高等学校	博 :(3)R-7	
	5	「護国会特殊行事計画一覧表（昭和 16 年）」		駒場博物館	1941 年	第一高等学校	博 :(3)Q-19	
	6	「第一高等学校特設護国隊非常時期編成表（第四表）」（1943 年 4 月 8 日）		駒場博物館	1943 年	第一高等学校	藤 :9-34	
	7	クラス別留学生一覧		駒場博物館	1943 年	第一高等学校	藤 :18-5	
5	1-1	「陳謝状」		駒場博物館	1944 年	A	藤 :8-18-2	＊
	1-2	「当国留学生 A 復学依頼ノ件」		駒場博物館	1944 年	張家資	藤 :8-18-4	＊
	2-1	「留日学生関係治安維持法違反事件不起訴処分者ノ復校ニ関スル件」		駒場博物館	1944 年	井出廉三	藤 :15-2-1	
	2-2	「犯罪事実」		駒場博物館	1944 年	満洲帝国政府	藤 :15-2-2	＊
	3	「本校特設高等科生徒起訴猶予仮釈放処分報告ノ件」		駒場博物館	1944 年	第一高等学校	藤 :8-10-2	＊
	4	「本校特設高等科卒業保留中生徒大学進入希望ノ件」		駒場博物館	1944 年	第一高等学校	藤 :8-10-1	＊
	5	書簡		駒場博物館	1944 年	C	藤 :8-67	
6	1	「決戦非常措置要綱ニ基ク旅行輸送ノ制限ニ関スル件」		国立公文書館	1944 年 3 月 14 日	内務省警保局		＊
	2-1	旅行許可願		駒場博物館	1944 年 9 月	劉秉鐸	藤 :15-6-7	
	2-2	旅行許可願		駒場博物館	1945 年 2 月 3 日	陳文彬	藤 :15-6-11	
	2-3	旅行許可願		駒場博物館	1945 年 2 月 2 日	趙連元	藤 :15-6-13	
	2-4	旅行許可願		駒場博物館	1944 年頃	特博信瓦斉爾	藤 :15-7-1	
	2-5	旅行許可願		駒場博物館	1944 年頃	石青山	藤 :15-7-10	
	2-6	旅行許可願		駒場博物館	1944 年頃	胡治邦	藤 :15-7-24	
	2-7	旅行許可願		駒場博物館	1944 年 7 月 28 日	連纕	藤 :15-7-35	
	3-1	書簡		駒場博物館	1944 年頃	特博信瓦斉爾	藤 :18-15-1	
	3-2	書簡		駒場博物館	1944 年 11 月 16 日	石青山	藤 :8-57	
	3-3-1	書簡		駒場博物館	1944 年頃	連纕	藤 :8-73	
	3-3-2	書簡		駒場博物館	1944 年 7 月 5 日	愛新覚羅憲容	藤 :18-10	
7	1	「欠席欠課ノ届出ニ関スル規定」		駒場博物館		第一高等学校	藤 :15-8	
	2-1	書簡		駒場博物館	1945 年 5 月 1 日	劉宗翼	藤 :8-60	
	2-2	書簡		駒場博物館	1945 年 4 月 5 日	陳来峰	藤 :8-53	
	2-3	書簡		駒場博物館	年不明 8 月 6 日	阮春瑩	藤 :8-54	
	2-4	書簡		駒場博物館	1945 年 4 月	林白田	藤 :8-74	
	2-5	書簡		駒場博物館	1945 年 5 月 17 日	楊永清	藤 :18-11	
	2-6-1	書簡		駒場博物館	1944 年 6 月 27 日	李玉田	藤 :18-26	
	2-6-2	書簡		駒場博物館	1944 年 6 月 27 日	許準	藤 :18-27	
	2-7	書簡		駒場博物館	不明	特博信瓦斉爾	藤 :18-23	
8	1	写真		駒場博物館	不明	不明	藤 :1-6	＊
	2	写真		駒場博物館	不明	不明	藤 :1-7	＊
	3	写真		駒場博物館	不明	不明	藤 :1-8	＊
	4	写真		駒場博物館	不明	不明	藤 :1-10	＊
	5	写真		駒場博物館	1943 年頃	不明	博 :(12)Z-2-30	＊
	6	絵葉書		個人蔵	戦前	不明		＊
	7	絵葉書		個人蔵	戦前	不明		＊
	8	絵葉書		個人蔵	戦前	不明		＊

	9	絵葉書		個人蔵	戦前	不明		＊
	10	絵葉書		個人蔵	戦前	不明		
	11	絵葉書		個人蔵	戦前	不明		
	12	「留日学生非常措置実施要領」		駒場博物館	1945 年 2 月 7 日	文部省	藤 :8-23	
	13	葉書		駒場博物館	1945 年 4 月 23 日	佐藤三郎	藤 :8-51	
9	1	『基督教青年会記録』（1938 年 4 月 -1939 年 11 月）		駒場博物館	1938-39 年	基督教青年会	博 :(7) B7-11-1	
	2	『基督教青年会記録』（1939 年 11 月 -1950 年 2 月）		駒場博物館	1939-50 年	基督教青年会	博 :(7) B7-11-2	
	3	ハートの可能性		個人蔵	1948 年	大原弘		＊
	4	特高最後の卒業写真		個人蔵	1949 年	大原弘		＊
	4（参考）	特高最後の卒業写真	『嗚呼向陵――わがたましひの故郷』	駒場博物館	2001 年	一高 25 年文集刊行会		
	5	三谷隆正肖像	『三谷隆正誄辭集』（1944）	駒場図書館	1936 年	不明		＊
10・11	1	『中国留日学生報』36 号	メリーランド大学ゴードン W. プランゲ文庫		1949 年 10 月 11 日	中国留日同学総会		＊
	2-1	『当代中日貿易関係史』		駒場博物館	1990 年	林連徳	藤ア :1-12	
	2-2	「生徒資料作成資料」		駒場博物館	1944 年	第一高等学校	藤 :6-3-61	
	3	「向陵コンプレックス」	『一高同窓会会報 向陵』39 巻 1 号	駒場博物館	1997 年 4 月	一高同窓会	博 :(7)C-2-6(49)	
	4	『馬克思主義哲学綱要』		駒場博物館	1983 年	韓樹英	藤ア :1-14	
	5-1	『戦後日本文学史』		駒場博物館	2017 年	李徳純	藤ア :1-13	
	5-2	「民族愛に目覚めた留学生活」	『一高同窓会会報 向陵』28 巻 1 号	駒場博物館	1986 年 4 月	李徳純	博 :(7)C-2-6(27)	
	6	『北京一高会通信 嚶鳴』25 号	『北京一高会通訳 1995-2005 合訂本』（北京一高会、2006 年）	駒場博物館	2001 年 4 月	北京一高会	博 :(7)J-1-23	
	7	書簡（鮑耀東から林連徳宛て）		駒場博物館	2001 年 4 月 9 日	鮑耀東	藤ア :1-6	
	8	書簡（吉人鏡から林連徳宛て）		駒場博物館	2000 年 8 月 14 日	吉人鏡	藤 : ア 1-8(1)	
	9-1	「忘れ得ぬ友垣」	『水路』25 号	駒場博物館	2020 年	渡部武	藤 : ア 3-1	
	9-2	「昭和十八年度寮生名簿」		駒場博物館	1943 年	一高寄宿寮委員	博 :(7)C-3-1(33)	
	10	『肺区域の選択的造影法とその応用』		駒場博物館	1958 年（1977 年再版）	林義春	藤ア :2-1	
	11	「持つべきは「良き友」と私の一冊」	『同門会誌』39 号	駒場博物館	2014 年	林義春	藤ア :2-3(17)	
12	1-1	本館：外観		駒場博物館	不明	不明	博 :(12) Z-15-9	＊
	1-2	本館：教室・授業風景		駒場博物館	不明	不明	博 :(7) E 1-5-12	＊
	1-3	本館前：学徒勤労動員出発式		駒場博物館	1944 年	不明	博 :(12) Z-2-6	＊
	1-4	本館前：駒場移転		駒場博物館	1935 年	不明	博 :(7) E 1-5-5	＊
	2-1	倫理講堂：外観		駒場博物館	1935 年頃か	不明	博 :(12) Z-2-12	＊
	2-2	倫理講堂：音楽会		駒場博物館	不明	不明	博 :(7) E 1-8-2	＊
	3-1	図書館：外観		駒場博物館	不明	不明	博 :(12) Z-15-4	＊
	3-2	図書館：内観		駒場博物館	不明	不明	博 :(12) Z-15-7	＊
	3-3	『寮務課日記』		駒場博物館	1945 年		博 :(7) A7 2-1-5	＊
	4-1	特高館：外観		駒場博物館	不明	不明	博 :(7) E 1-8-5	＊
	5-1	寄宿寮：洗面所と生徒		駒場博物館	1935 年	不明	博 :(7) E 1-7-1	＊
	5-2	寄宿寮：中寮前広場 一高体操		駒場博物館	1944 年頃か	不明	博 :(7) E 1-5-12	＊
	5-3	寄宿寮：寮内広場にて寮歌祭		駒場博物館	不明	不明	博 :(12) Z-2-10	＊
	5-4	寄宿寮：自習室にいる生徒		駒場博物館	不明	不明	博 :(7) E 1-5-6	＊
	5-5	食堂：全寮幹事長による檄文掲示		駒場博物館	1945 年	不明	博 :(7) E 1-5-18	＊
	6-1	嚶鳴堂：入寮式		駒場博物館	不明	不明	博 :(12) Z-10-9	＊
	6-2	嚶鳴堂：外観		駒場博物館	不明	不明	博 :(12) P-1-8	＊
	6-3	嚶鳴堂：寮生劇		駒場博物館	不明	不明	博 :(12) Z-10-10	＊
	6-4	嚶鳴堂：昭和 15 年 寮委員議長選挙		駒場博物館	1940 年	不明	博 :(7) E 1-5-8	＊
	6-5	寮務室：外観		駒場博物館	不明	不明	博 :(7) E 1-5-2	＊
	6-6	寮務室：寮委員会		駒場博物館	1940 年頃か	不明	博 :(12) Z-10-6	＊
	6-7	寮務室：寮委員集合写真（昭和 11 年夏・第 143 期寮委員会）		駒場博物館	1936 年	不明	博 :(12) Z-17-1	＊
	6-8	『向陵時報』第 89 号		駒場博物館	1936 年	第一高等学校寄宿寮	博 :(7) B-5-6-88	＊
	7-1	物理学教室：外観 生徒集合		駒場博物館	不明	不明	博 :(7) E 1-6-5	＊
	8-1	正門前：生徒		駒場博物館	1938 年	不明	博 :(7) E 1-6-5	＊
	8-2	一高前駅：戦後再建後の駅		駒場博物館	1946 年頃か	不明	博 :(7) E 1-5-14	＊

（博：駒場博物館、藤：藤木文書、藤ア：藤木文書アーカイヴ資料／＊：パネル展示）

本展示にあたり貴重な資料を提供くださった東京大学駒場博物館、東京大学駒場図書館、及び藤木成彦氏、林義春氏、大原弘氏に深謝申し上げます。

主要参考文献一覧（刊行年順）

- 第一高等学校寄宿寮編『向陵誌』第一巻（第一高等学校寄宿寮、1937 年）
- 第一高等学校編『第一高等学校六十年史』（第一高等学校、1939 年）
- 『第一高等学校一覧　昭和 18-19 年』（第一高等学校、1944 年）
- 藤木邦彦『加茂藤成記』（1968 年 -1993 年まで作成）
- 西沢佶編集代表『写真図説 鳴呼玉杯に花うけて――第一高等学校八十年史』（講談社、1972 年）
- 藤木邦彦編「第一高等学校年表」（『向陵』一高百年記念号、一高同窓会、1974 年）
- 二見剛史「第一高等学校における中国人留学生教育」（『国立教育研究所紀要』95 号、1978 年）
- 「中国からの留学生」（『向陵誌』駒場篇、一高同窓会、1984 年）
- 『史聚』第 28 号（史聚会、1993 年）
- 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校自治寮六十年史年表』（一高同窓会、1994 年）
- 喬鍾洲「受難の日々（上）」（『向陵』第 38 巻第 2 号、1996 年 10 月）
- 喬鍾洲「受難の日々（下）」（『向陵』第 39 巻第 1 号、1997 年 4 月）
- 朱紹文「暗い谷間時代の思い出――歴史の証言として」（『向陵』第 41 巻第 2 号、1999 年 10 月）
- 程万里「私と日本との六十年」（『向陵』第 41 巻第 2 号、1999 年 10 月）
- 李其華「世紀回眸」（『向陵』第 42 巻第 1 号、2000 年 4 月）
- 日本華僑華人研究会、陳焜旺編『日本・華僑留学生運動史』(中華書店、2004 年)
- 林茂生（古谷昇、陳燕南訳）『日本統治下の台湾の学校教育 : 開発と文化問題の歴史分析』（拓殖大学海外事情研究所華僑研究センター、2004 年）
- 程万里「一高留学生の愛国抗日行動の回想」（『向陵』第 46 巻、2004 年 10 月）
- 『北京一高会通訊　1995-2005 合訂本』（北京一高会、2006 年）
- 夏目賢一「第一高等学校における留学生教育の再編と日中関係――特設予科および特設高等科の事例、一九〇八年 - 一九三七年」（『東京大学史紀要』25 号、2007 年）
- 王雪萍「留日学生の選択」劉傑、川島真 編『1945 年の歴史認識――「終戦」をめぐる日中対話の試み―』（東京大学出版会、2009 年）
- 朴成河「日本帝国の解体と朝鮮人「内地留学」の終焉―― 戦後直後・朝鮮人留学生政策を中心に」（『在日朝鮮人史研究』42 号、2012 年）
- 王雪萍「戦後期日本における中国人留学生の生活難と政治姿勢をめぐる葛藤」大里浩秋編『戦後日本と中国・朝鮮――プランゲ文庫を一つの手がかりとして』（研文出版、2013 年）
- 国分良成他『日中関係史』（有斐閣、2013 年）
- 郭承敏『ある台湾人の数奇な生涯』(明文書房、2014 年)
- 王雪萍「救済･召還をめぐる国府の中国人留日学生政策の迷走」大里浩秋､孫安石編『近現代中国人日本留学生の諸相――「管理」と「交流」を中心に』（御茶の水書房、2015 年）
- 北京日本帰僑聯誼会編『中国留日同学総会二十年 (1946-1966)』（内部発行、2015 年）
- 韓立冬『近代日本的中国留学生预备教育』（北京语言大学出版社、2015 年）
- 石島紀之「対日『協力』の諸相――『協力』政権、民衆」（『現代中国研究』第 35・36 号、2015 年 11 月）
- 見城悌治「一九三〇 - 四〇年代における日本社会と中国留学生の文化的交流・軋轢 」（『日本思想史研究会会報』31 号、2015 年）
- 李徳純『戦後日本文学史』（人民文学出版社、2017 年）
- 川島真他編『東アジア国際政治史』（名古屋大学出版会、2017 年）
- 菊池一隆『戦争と華僑』（汲古書店、2018 年)
- 王雪萍「在日中国人メディアが記録した留日学生の思想の変化――中国留日同学総会の機関紙『中国留日学生報』（1947-1949）を手がかりに」（『東洋大学社会学部紀要』第 57 巻第 1 号、2019 年 12 月）

【付録】藤木成彦氏インタビュー

2021 年 4 月 6 日（火）、駒場キャンパス 101 号館 15 号室にて実施
聞き手：宇野瑞木、高原智史、崎濱紗奈、髙山花子、前野清太朗

2021 年 4 月 6 日（火）、一高プロジェクトでは、新緑の駒場キャンパスにて、故藤木邦彦氏のご子息であられる藤木成彦 (しげひこ) 氏をお迎えする機会を得た。お父様の遺された一高時代の留学生関連資料である「藤木文書」についてインタビューをさせていただくためであったが、成彦氏がお父様のご遺品と初めて対面される場に立ち会わせていただく形ともなった。その折のやり取りを一部ダイジェストにして収録する。

「藤木文書」が駒場に残された経緯

宇野：このコロナ禍の中、駒場キャンパスまでお越しくださり、誠に有り難うございます。本日は、お父さまのご遺品を初めて手に取っていただく機会となりますので、ゆっくり御覧になって思い出されることがあればお話しいただくような形で進められればと思います。

藤木：わかりました。

宇野：少し経緯をお話ししますと、教養学部の歴史学部会という 14 号館の 5 階のお部屋に、ずっと段ボール 2 箱分が置いてあって、どなたが所持していたものか分からない状態だったようです。2019 年の春ごろにこういう資料があるということを教えていただきまして、EAA ではちょうど一高プロジェクトを遂行中でしたので、私と高原さんで整理を担当する運びとなりました。そして調査を進めておりましたところ、所持者が藤木邦彦氏であるということがわかり、大変有り難いことに、邦彦氏のご子息成彦さんより駒場博物館にご寄贈頂くことができました。改めて心よりお礼申し上げます。さて、そもそも、この「藤木文書」が、なぜ大学に残されていたのか、ということなんですが。

藤木：研究室にこれを置いてきたんでしょうね。とっくに東大は退官しているのに、ずっと置きっぱなしでいたのが本人も気になっていたらしいんです。1 回、普通の乗用車の後ろの席にいっぱいぐらいの生資料を随分、うちに持って帰った記憶があります。今思えば、それは私が 25、26 歳ですから、50 年前のことです。

宇野：成彦さんが車を出されて、車に積まれて持ち帰られたということですか。

藤木：ええ。研究室棟がありましたよね。まさに昔の寮があったところ、つまり南寮のさらに南の線路沿いに研究棟があったと思うんですが。

高原：今でいう矢内原公園とか、その辺ですか。

藤木：そう、あの辺です。

高原：今、数理科学研究科の研究棟になっているところ辺りですね。

宇野：では、今の 14 号館ではなく、かつてはそこに歴史学の研究棟があったのですね。箱のふたには「並木」と書いてあるので、おそらくそれを歴史学部会の並木頼寿先生が、中国人留学生史関連の科研に関わっていらっしゃったこともあり、引き継がれていたのではないかと思われます。

藤木：思えば、父は敢えてこの資料を大学に残していったのかもしれません。

『史聚』の追悼号をめぐって――教え子・同期生から見た藤木邦彦

宇野：ここに『史聚』という雑誌があります。藤木先生の追悼特集号が組まれたものですね 。第 28 号（1993 年 11 月）と第 41 号（2008 年 3 月）の 2 号分あって、前者は亡くなってから間もない時期の号で、もう一つが亡くなって 15 年も経ってからの号ですね。こんなふうに亡くなって 15 年も経ってから特集を組むということはなかなかないのではないかと思います。

藤木：ありがたいことでございました。

宇野：28 号には、藤木先生の年譜や著書・編著・論文目録が掲載されています。41 号には、成彦さんも「ビートルズとリンゴ箱の机　父の思い出」という味わい深いエッセイを寄せられていて、一高時代から教養学部に至るまでの状況やお人柄が伺えて、たいへん貴重だと思います。
『史聚』の年譜によれば、邦彦氏は、22 歳で東京帝国大学国史学科を卒業後、そのまま大学院に進まれて、修了して、24 歳ですぐに一高の講師になっています。その年には、黒板勝美教授のもとで『南紀徳川史』も校訂刊行していますから、大学院時代に原資料を読む訓練をかなり積まれたのでしょうね。後の 1951 年頃の東京大学教養学部の授業では原資料を学生たちに見せて授業をしていたと、笹山晴生氏のエッセイ にも書かれています。「日本法制史史料講読」という授業だったようです。当時、駒場の日本史の先生は井上光貞先生と藤木先生が担当されていたとあります。

藤木：いま思い出したんですが、何が一番楽しかったか、について話をしたことがあります。本人は自らしゃべるような人間でもなかったので、こういう機会はめったにないんです。大学院のころに同じ研究グループがあって、それは当然ながら戦争も激しくなる前の話ですが、京都の古刹へ行って、その寺の屋根に上って遊んだと。それが一番面白かったというんですから、この人はあまり他に面白いことがなかったんだなという感じはします。

宇野：院生のとき、それはいいですね。京都のお寺で蔵などに入って調査されたということでしょうね。

同期にも敬語

藤木：うちの父はいわゆる同期でも敬語を使うんです。本人が、どうしてもため口のような口調はできない、自分でもおかしいんだけれども、というようなことを言っていた記憶があります。同期で若いころの仲間であれば、「俺」「おまえ」の仲というのが普通だと思うんですが、最後までそうでした。学生さんに対しても非常に丁寧な言葉を使う、そういう日常でした。

宇野：ご家族の間ではどんな言葉を使われていたんですか。

藤木：これが基本的に無口で、「今日、学校でこんなことがあってさ」みたいなことは絶対に言わないんです。言わないから、私どもも知らないんです。どういう悩みがあっただとか、学校等から今日こう言われてとか、そういうエピソードが全くないんです。聞いていないものですから。

宇野：やはり本当に物静かと申しますか、穏やかなお人柄だったのですね。

一高の留学生課長と 60 年安保学生運動の担当

藤木：いろんな方が死んだ後にいろいろと褒めてくださるのもあれなんですが、温厚であったことは事実です。誰にで

も丁寧な口を利いて、要するに偉そうにしてはいかんということを、身をもって考えていたように思われました。

宇野：それは留学生に対してもそうだったんでしょうね。

藤木：周りの評価も穏やかな人物というものだったようです。これは母からも聞きました。それで、ちょっと難しそうな、例えば当時の留学生の関する責任者について藤木先生お願いしますよ、というようなことになったんじゃないかと思われます。これは 60 年安保のころも確かそうでした。対学生運動担当の第 6 委員とか第 8 委員とか、そんな名前はご存じでしょうか。今もそういう制度は名前を変えて、当然あると思います。何年間かはそれを担当したことがある。表面的かどうか分かりませんが、人の話をよく聞く、言い分をよく聞くという、そういう点では、そういう役割には向いていると周りからは思われていたのではないか。どういういきさつでそういうことになったのか分かりませんが。

宇野：なるほど。人と人の難しい関係性や局面を調整するようなところに、いつもいらっしゃる感じですね。

藤木：調整能力はないんですけれども。うまく話をまとめるような人というのはよくいますが、そういうタイプでもないんです。例えば、ひたすら両方の言い分を聞いて「困った、困った」と言っているだけの人物だったように、私には思えます。

宇野：そういうお話を伺うと、熊本の方の気質もあるんじゃないかなと、私たちは思ってしまいます。EAA の研究会で、ずっと石牟礼道子の『苦海浄土』を読んでいましたので。勿論、石牟礼さんは全然関係ないですけれども、熊本のあの辺りの土地では、「もだえ神さん」といって、苦しんでいる人のそばで、何の役に立つわけでもなく、ただ一緒に心を痛めるだけの精神が非常に大事にされたという話もありました。石牟礼さんは「加勢する」という言葉で表現するんですが、要するにちょっと加勢するだけというのが、人に寄り添う方法として、熊本にあったと石牟礼さんは書いているんです。

藤木：そうかもしれません。

宇野：あとはやっぱり九州、熊本というのは昔から海外に開かれていた土地ですから、アジア諸国とか外国とかの方々に、すごくある種親密な心情を持ちやすい土地柄ではあったのではないか、とも考えてしまいます。そういうお話を伺うと、人との接し方の根本に何かあるのかなと。

藤木：何か常におどおどしていました。ちょっと言いようがないんですが、当てになるような、ならないような感じで。うちの父は、話を聞くだけで結局何もできない、悩んでいるだけなんです。好意的に解釈すれば、例えば留学生の立場に立って「皆さん方も困るでしょうね」と。まさに敵国に来ているわけですから。当時は実は敵でも何でもないのに日本側が勝手に侵略しているだけの話だと思うんですけれども、そんなことは言えないし。

留学生から藤木邦彦宛ての書簡

宇野：藤木文書には 48 通ほど書簡類があるのですが、これらは殆どが藤木先生宛ての手紙なんです。大体 1944 年から 1945 年に集中しているのですが、個人的なことを相談したり、その経過を知らせたりしていますので、どれだけ一人一人の状況を把握しているか、親身になって相談に乗っているかがよく分かります。

藤木：真剣に話を聞くような人間だったとは、私も思っています。

宇野：ええ、だからこそ、こんな細かいことまで手紙に書いてくるんだと思うんです。例えば親が病気であると結構書いてあって、病状はこうなりましたとかいった報告も逐一受けていたことも伺えます。ちょっとご覧いただければ。上にいて色々と指導とか指令を出すとかじゃなくて、直接的に一人一人面倒を見ている感じが非常にします。藤木先生自体がそれぞれに対処しているというのが。こういうお手紙なんですけれども、これは内モンゴルのトブシンワチルさん

です。後に、内蒙古大学の学長にまでなった方です。お名前が片仮名で書いてあります。はがきや書簡があるんですけれども。

藤木：初めて知りました。

宇野：「拝復」とあるから、藤木先生が書かれた手紙にまたお返事を書いているということですね。「休学願の様式をありがとうございました」とか、こういうのを細々と世話しているという。「母と私が病気に脅かされて」とか、こういうふうなものをちょっとずつ紹介していくことができたらと思うんです。

藤木：でも中国の方々は、めったに人には悩みは言えない時代だったんじゃないでしょうか。

宇野：お手紙でどこまで本当のことを書けるかということですね。

藤木：当然ながら検閲されていたんじゃないかと思います。

宇野：確かにそうですね。分かってくれるだろうと思って、違う言葉で書いている可能性もありますし、もうちょっと丁寧に裏側まで読み取らなければいけないと思います。基本的には、留学生がこういうことで困っていて学費が払えないとか、まだ国から戻れそうにないから休学の書類を作ってくれみたいなものとか、復学に関するものなどが多いので、実際の事情そのままを伝えているとは限らないですよね。でもともかく、それぞれの学生の状況を把握して、身分に関する書類申請も含めて全部藤木先生が窓口になって面倒を見ていたようです。

藤木：それは全然知りませんでした。

宇野：殆どこうやって藤木先生宛てに来ていますね。こちらは「満洲国」からですね。何か困ったことがあっても、まずは藤木先生に全部送っていたんだと思います。

「先生は差別されるわれわれの味方でした」――胡秀山氏について

宇野：これは、台湾からの留学生・胡秀山さんに関する書類です。胡秀山さんは、成彦さんのエッセイの最後に、戦後かなり経ってから成彦さんが台湾でお会いした際、「先生は優しい方でした。差別されるわれわれの味方でした」と言ってくれて嬉しかったと書かれていた方なのですよね。

藤木：そうですね。具体的なことはわかりませんが。恐らく、留学生が問題を起こしたとかそういうことじゃなくて、当時は特別高等警察や憲兵が主要大学に出入りしていたようですね。あれが難癖をつけると、書類は万全のものを用意して答えなければいけないということがあったに違いないですよね。そういう中でのことだと思うんですけれども。

宇野：気になるのは、『史聚』第 41 号の笹山氏の文章で、「日本の中国侵略が進むと共に先生は特高から留学生の身を守るという困難な役目を負うことになり、ご自身も警察の取調を受けたこともあったという。」と書かかれている点です。これはどういうことなんだろうと。胡秀山さんが、留学生たちが差別を受けるような時代であっても、先生は常に私たちの味方でしたとおっしゃったのは、具体的に何かあったのではないかなと思ったりするんですが。

藤木：父は「今日、こんなことがあって警察に呼ばれちゃったよ」とか、そういうことを言ったことがないんです。母にも言っていないんじゃないかな。今日もすぐ上の姉と偶然話をしたんです。何か覚えていることはないかと。何しろ、例えば親切だったと言われてもしょうがないので、例えばどんなことがあったんですかとか、そういうことをお姉ちゃん、聞いてないかと私も言ったんですけれども、何も覚えてもいないし聞いてもいないと。ですけれども、留学生の人たちは、いろんな方が我が家に週末とかに来ておられたことは事実です。それは私が覚えているぐらいですから、少なくと**も昭**

和 27 ～ 28 年以降の話です。そのころは当然ながら留学生担当はしていないわけです。いろいろと慕ってくれて、留学生が来てくれてお土産をくれたというようなことを、姉が言っておりました。

宇野：それは特設高等科を卒業された方が日本にいらしたときに、ご自宅に何かお土産を持って挨拶にいらしたのでしょうか。それとも東京大学とかに在学中の留学生？

藤木：普通の学生さんだったのももちろん多いんです。でも、例えば、中国名であったりすると向こうの人なんだということをわれわれも分かると。それで姉に聞くと、時々何をもらったかというと、パイナップルをもらったと。

宇野：台湾からの留学生でしょうか。当時は高価なものだったでしょうね。

藤木：そうなんです。それからいろんな人から拓本をいっぱいもらったようです。それから極彩色の中国絵画みたいなのが随分家にたまったと、それを覚えていると姉が言っておりました。

宇野：そうした中に、胡秀山さんもいらっしゃったということでしょうか。

藤木：よく来ておられましたし、夫婦でも来られたんです。確か、向こうは夫の姓と妻の姓を一緒に言うんです。その人は「胡連碧蘭」という名前であることをいまだに覚えています。

宇野：ということは、一高を卒業された後にもまだお付き合いがあって、ご夫婦でよくご自宅にいらっしゃっていた。それでその連絡先もご存じだったんですね。

藤木：はい、そうです。父が亡くなったのは私が 50 ぐらいのときですから、台湾に行った頃はまだ元気でした。父に連絡先を教えてもらったと思います。

宇野：胡秀山さんと台湾で会われたときは、成彦さんは何歳ぐらいだったのでしょうか。

藤木：32 か 33 歳ですね。大学を卒業してマスコミに入りまして。それで経済部というところに所属になって、そこに 35 年勤めたんです。その中のある時期に自動車産業を担当せいと言われた時期がありました。その時に台湾にトヨタ自動車が工場を造って、そこで乗用車も商用車も造ったんですが、そこで造ったものを日本に輸出するようになりました。そのころに自動車に限らず、台湾に日本の産業についての取材に行ったことがあります。その時に胡秀山氏のことを思い出しまして、これはちょっとご挨拶しに行くべきであろうということで。ご自宅の電話番号を父が探し出しまして、私が電話してお目に掛かりたいと言いましたら、「藤木先生の息子さんでしょう」というような答えが。その時はもう何十年ぶりで私が 6、7 歳、8 歳、9 歳、その辺りにお目に掛かったことなんですけれども、そのぐらいの年になって「ちょっと仕事でこちらに来ましたのでごあいさつします」という、そんなことがあったという縁です。でもどんな話をしたのか、それから父が味方をしたという、その言葉だけを覚えていて、「実はこんなことがありましてね」という話は聞いていないんです。今、思えば非常に残念な話です。どんなふうに父が良かったんですか、とこちらから聞くのも変な話で、結局、会話は何一つ覚えていないんですけれども。ただ、中華料理をごちそうになって帰って来ちゃったということです。

宇野：そうなのですね。でも随分、お付き合いがあったということですよね。

藤木：その人に関しては、です。もっとも何人来ようと私は分かりませんから。学生さんだなとか、中国人だな、というぐらいなもので。先ほど偶然、姉と話したときには「随分、自宅を訪ねて来る人が多かったよね」なんていうようなことを言っておりました。

宇野：『史聚』には、日本人の教え子たちがご自宅に訪問したエピソードもいくつか見えますよね。

一高同窓会館に一家で住んでいた頃――昭和 26、27 年

宇野：成彦さんのエッセイには、お父さまは実は落語とかラジオとかビートルズとかもお好きだったと書かれていますね。

藤木：そうですね。落語と野球。野球は大好きでした。とにかくギャンブルとかお酒というのはあまり強くないんです。ギャンブルはしないし、お酒も飲まないことはないんだけれども酩酊してしまって、うちにたどり着いて玄関でぶっ倒れるということは随分ありました。昔は何しろ飲み会が多いですから。

宇野：その飲み会の話で思い出しました。同窓会館の話をもうちょっとお聞きしなければいけなかったんです。当時、昭和 26 年からの 2 年間は、駒場キャンパス内の同窓会館に熊本から家族を呼び寄せられて、一家でお住まいだったのですね。何かで書かれていましたが、1 階の和室のお部屋に住まわれていて、襖を 1 枚隔てた向こうで、毎晩どんちゃん騒ぎだったのだけれども、そこでご執筆されたりお仕事されたりしていたという。

藤木：要するにその直前まで熊本にいたわけなんです。戦時中は家族を二手に分けて第一次疎開、第二次疎開という形にして熊本に住まわせていた。その時は父方の親類の家の持っている貸家で、そこに無理に住まわせてもらっていたという時代がありました。そこで戦争が終わって、さて東京に帰んなきゃいけないんだけれども、青山の家は焼けて、もうない。しかもそれは借家だったんです。従って、どこかに住まなきゃいけないんだけれども、当時、一家は総数を足すと父の祖母を含めて 7 人になるわけです。そうするとなかなか手ごろの家もないし、当時のことですから金もないんです。すっかりなくなっちゃっている時代ですので。しかし、戦争が終わって、ここでまた教員として働かなきゃいけない。東京にいなきゃいけない。熊本で借りていた家というのは 2 軒にまたがって、時期をたがえて 2 回にわたるんですけれども、そう世話になるわけにもいかないというわけで、とにかく東京に出なきゃいけない。住むところがないですし、景気が良くなる前の話ですから、家もないし、払える金もないという状態で。なぜ同窓会館だったのかを私は聞いたことはないんです。でも確かにこれは住めるね、という感じはあるんです。2 間というか、8 畳間を間にカーテンで仕切っただけでありますが。でも当然水道もありませんし、ガスもないんです。ガス、水道はまさに宴会場のところに行って、自分たちの鍋釜をそこにかけて料理をして、それをそそくさと自分の部屋まで持って帰るという、そういう生活でした。そこに 2 年間いました。それからやっと朝鮮戦争も落ち着いてきて、その後、公務員のための住宅、官舎ができて、やっと住むことになったのが新宿区戸山町というところの公務員住宅です。そこに入ったので、熊本に残してきた祖母を引き取った。

宇野：この時、ご家族は何名ですか。

藤木：合計 7 人になるわけです。私に姉が 3 人。それに父と母、祖母。

宇野：かなりの大所帯ですね。

藤木：そうですね。家があるだけありがたい時代だったと思います。

宇野：同窓会館はすごく騒がしかったけれども、その辺りはしょうがなかったという感じですかね。

藤木：そうですね。さすがに家は欲しいと思ったんじゃないでしょうか。何しろトイレもないわけですから。

宇野：子育てするのは大変でしょうね。

藤木：昔はそうだったんですけれども、こういう建物というのは男便所しかないんです。そこへ用を足しに行かなきゃいけないわけですし、水道もないし、非常に困ったと思います。

宇野：なるほど、ありがとうございます。そういえば、さっきの笹山さんという方は、同窓会館で進路相談したという

ようなことを書かれていましたね。当時、戦後しばらく同窓会館に住んでいたという先輩の阿部秋生のもとに会いに行っていたという今井源衛という有名な『源氏物語』の学者のエピソードもありますから、もしかしたら時期が重なっているかもしれません。ちなみに、今井源衛は、昭和 12 年に一高に入学したのですが、病気でかなり休学してしまって、及第できないと一高を卒業できないかもしれないという局面で、担任の藤木先生に、安心して帰郷静養していらっしゃい、と励ましてもらい、何とか卒業できるようにしてもらったと、大変感謝していました（今井源衛「往時茫々」『弥生道』1990 年）。この三者は、みな平安時代の専門家で興味深いところです。

成彦氏の高校時代のエピソード――日本史教科書をめぐって

宇野：これまで周辺の方々との関わりについて伺ってきたのですが、最後に少し角度を変えて、成彦さんご自身がお父さまにたいしてどう感じていらっしゃったか、ということを伺ってもよいでしょうか。日本が中国に侵略していった時代とか、安保闘争とか、いろんな時代を生きていらっしゃったお父様に対して、なにか思われるところはございますか。

藤木：あのころ（安保闘争の時代）はとにかく、われわれにはとんでもない時代であったわけです。われわれは本を見るなり、映画を見るなり、何だかんだでそういう知識があって、それについて思うところは必ずあるわけなんですが。

こんなことがありました。高校 3 年生の頃に日本史の授業がありました。その時に使っている教科書は私の父が書いたやつなんです。それに対して、いわゆる進歩的な生徒たち 4、5 人のグループが、この教科書はけしからんということで黒板の前に立って発表したことがあります。それは何かというと、過去の天皇に対して敬語が使ってあるというわけです。そこで「後鳥羽上皇は何々された」と書いてあるわけ。「お遷りになり」とか。これは困ったもんだと私も思っておりました。それに対して、その発表をする気持ちも無理からぬことだと、私も子ども側からでも思っておりまして、特に反論もせず「そのとおりだよね」なんていうことを言いましたけれども。後日、すぐではなくて、しばらくしてから、私は父にこんなことがあったよと話しました。わが親と子の間ではそんなことを言うのも珍しいんですけれども、何と答えたかというと「だってそうするもんだもん」というのです。これも私としてはいかがなものかなということも思うんです。しかし、それも無理もないかなという気持ちもあります。

現実に検定という制度がありますし、それはけしからんという立場もそうなんですが、検定を全くなくすると結局どうなるのかというと、それまた私は容易に想像が付くような気もするのです。私は文部省の検定に別に賛成しているわけでもないし、そんなことをさせられる役人も気の毒だなというような気持ちもあるし、それからけしからん野郎だと思うような気持ちももちろんあるんです。それまた同時に、高校の授業の時のその研究グループを、私は心の中では賛成はしているんですけれども。過去の天皇の行為について敬語、しかも最大級のものを使うのは教科書としておかしいんじゃないのかと。事実があったかなかったかと、そういうふうに書けばいいんだということを思うんです。でも、それと同時に、この研究グループについて、若干の反発も私はありました。

つまり俺たちは分かっているんだぞと、そういう教科書を採用するとはいかがなものであるかと、それだけなんです。俺たちは分かっているんだよという感じをアピールするためという気持ちありまして、それもあまり気持ちのいいことでもないなというふうに思うのです。そういう話なんですが、父の反応はそういうことでした。「だってそういうもんなんだもん」と。これはまた歴史家としてどうなんでしょうという感じも、もちろん私もあります。これは難しいところなんです。今の新聞、放送は敬語を使っておるんです。勿論、どんどん減らしてきている。でもなくなってはいないんです。相変わらず今後も使い続けるでしょう。

それは立憲制とはいえ、この国は君主制ですから。この辺はどうなのかなという感じはありますので、複雑な気持ちでありますし、なかなか難しいです。だから、通常の敬語なのか、それとも皇室に対する無条件の最大級の敬語をここは使うべきなのか、なんていうのは近代から現代史になってくると歴史を扱う人たちでも、いざというと困るときもあるんじゃないかというふうに思ってしまいます。結論のある話ではないんですが、要は、父はリベラルではあるんですけれども、むしろヒューマンのほうが合っているのかなという気がいたします。思い出すのはそのぐらいで。

宇野：これはすごく興味深い考えさせられるお話ですね。やっぱり歴史を研究されてきた方は、そこは紋切型にいえる問題じゃない、深いなと思います。

崎濱：今、高校時代のお話ということだったのですが、具体的には 1960 年代でしょうか。

藤木：私が 18 歳のころですから、1963 年くらいですね。

宇野：そこで、ひとつ伺ってみたいのですが、安保問題に対応する大学の部の担当に藤木先生がなられたというお話を聞きましたけれども、ちょうど成彦さんも大学時代はまさに学生運動が真っ盛りの頃ですね。

藤木：そうでしたね。私が入ったのは昭和 39 年（1964）でした。

宇野：1964 年入学で 1968 年卒業となると、どんどん学生運動が盛り上がっていく時期でしょうか。当時お父さまと何かやりとりがあったことはありましたか。

藤木：それについて父がどうのこうの、どういう態度であったか、あるいはこんなことを言ったというのも材料はないです。苦々しく思っていたようには見えましたけれども。いわゆる学生運動は、世の中が分からないくせにというような感じで見ていたことは事実なんです。全否定することもない。それには根拠もあるしという感じですね。といって、どんな発言があったかとか、そういうことを含む具体例がないんですけれども……ないわけじゃなかったな。何とか学生運動担当という先ほど申し上げたやつで、学生の威勢のいいのに何人に囲まれてどうのこうのというのがあったと、後で聞いたかな。母によると、その時はさすがにうちの父も怒って、学生にげんこつで殴りかかろうとした。止めてくれた人がいたようで、それしか覚えていないんです。どういうわけでというのが父も言わないし、母も聞かされていないし、想像は付きますけれども。そこまで怒るというのは、さすがに若いころとはいえ、なかなかそういうこともあるかなということはありますが。

宇野：やはり、かなり大変な局面に対処されていたのですね。

藤木：母によれば、誰も彼も押し付け合っていたらしいんです。好んでやったはずはないので。

宇野：なるほど、1944 年からは留学生だけではなく、本科の一高生も含めての生徒主任も兼任して、戦後も安保対策担当ということで、学生と接することをずっとなさってきたような印象ですね。

戦後の歴史観と後の世代への影響

宇野：さきほど、邦彦氏はリベラルというよりはヒューマンな方であったとおっしゃいましたね。東大には皇国史観の強い教授もいたようですが、藤木先生はいつも国籍に関係なく、人間の立場から留学生に接するところがあったのではないでしょうか。そのように留学生と関わってきたからこその歴史観というものをむしろ持たれていたんではないかと思うんです。

藤木：本当にその辺りは分かりません。ものの本を読むと平泉何某というのは……。

高原：多分、H 教授というのが……。

崎濱：亡くなられてすぐの追悼号の『史聚』（1993 年）の直木孝次郎さんのエッセイですね。

宇野：「主任教授 H は、すこぶる国粋主義の先生であると聞き、藤木先生にどうしたものでしょうとご相談した。先生は積極的にお薦めできませんがとおっしゃった。」と書いてあります。そうして直木先生は京大に進むことになったようです。

藤木：多くの人が内心思っているわけですよね。いくらあの時代でも、変なやつと思っているはずなんです。もちろんシンパはいたに違いないし、そういうふうに思い込んじゃっているような思想になってしまう人もいたとは思うんですが。父がそれに対して、どのような態度を取ったのかというのは 1 回も聞いたことがないし、周りの人からも聞いたことがないんです。

宇野：戦中戦後でお父さまの歴史観が変化したということは考えられますか。

藤木：分かりません。何しろ、言わないです。家族同士で世間話しているぐらいの感じで、例えば、子どもが大きくなったら一緒に酒を飲んでもいいし、テレビでのホームドラマであれば、いろんな場面があるに違いないんだけれども。そういうふうに自分で家族内で話題をリードして何だかんだと、「最近どうだ、おまえ」なんというようなことを一言も言わない。こちらも別に煙たいですから、何も相談することもなくというようなことで、非常にそういう面では関係は薄かったです。別に悪い意味じゃないんですけれども、濃厚じゃないんです。なので、こういう学校で事件があって、ないしは世の中でこんなことがあったけれども、おまえのところの学校ではどうだと、なんという話はしないですから、話の継ぎようがないという。

従って、歴史観、歴史研究、史実を研究するないしはというような話はしたことがないです。でも、本人とってはそれは面白いことだったと、さっきの屋根に上った話があるほど、それが面白いのかと。そのような影の薄い人物でした。

宇野：そんなことはないと思うんです。実際、多くの方が、亡くなって 15 年もしてから追悼号に文章を寄せられていますし、また、日本近代史の鳥海靖先生が寄せた藤木先生の追悼文 には、モンゴルとか中国のいろいろ活躍されている長老クラスの大学者の方々から、その藤木先生のお名前が出てくることがあって驚かされる、といったことが見えます（展示 1、鳥海靖「藤木邦彦先生を偲ぶ」参照）。やはり、目立たないところでも大変な影響を与えていると思います。

藤木：そうかもしれないです。つまりは担当者が 1 人だったんでしょうね。

宇野：本当に藤木先生に集中していたかもしれないですね。

『加茂藤成記』

藤木：戦後にもいろんなことをやっておりまして、東南アジア等の留学生に日本史を教えたようです。ここに『加茂藤成記』というものがありまして、年譜のところに、「東南アジア諸国、中近東、アフリカ、中南米、オーストラリア諸国よりの留学生に日本史講義」とあります。これは 1961 年。

宇野：これは大変美しい本ですね。和紙に墨書で書かれていて。

藤木：父が 1968 年に東大を退職してから数年の間にまとめたもので、藤木氏の略史と略系図みたいなものなんです。これを見ていただくとお分かりのように、筆まめでメモが大好きでした。
宇野：ちょっと拝見しても。藤木の一族はもともと上賀茂下賀茂神社の祢宜であったと。

藤木：はい。そこからだんだん武士に近くなって、細川幽斎に仕えるようになり、関ヶ原の合戦の後、京を追われて九州豊前に行ったときに、藤木家の一族もついていったんですね。

宇野：その頃から一族が九州に移り住んでいて、お父様は熊本の山崎町にお生まれになったと。

藤木：はい。

宇野：年譜の部分を拝見すると、1963 年には「皇太子、皇太子妃両殿下に進講」と書いてありますね。

藤木：そうです。その 4 年後には天皇ご夫妻にも進講しました。

『日本史』（世界書院、1950年）草稿

宇野：ところで、これはお父様の単著で『日本史』という世界書院から 1950 年に刊行された本の草稿なのですが、結構手直しされていて、たいへん興味深いです。お父様が『日本史』を執筆されたのは戦後なんでしょうか。

高原：出たのが 1950 年で昭和 25 年。戦前にもう書きためられていたのか、戦後になってから書かれたのかは、ちょっと分からないですね。

藤木：戦後だろうな。

高原：第 4 巻の近代から現代の辺りを扱う章だと、結構直した跡についても世界情勢の激変を反映したかもしれない部分が見られるので、いつ書かれたのかは大変気になるところです。

藤木：それはどちらか正確に知りたいところですね。

おわりに

宇野：そろそろ終了しなければならないお時間かと思いますが。『加茂藤成記』につきましては、しばらくお借りしても……。

藤木：どうぞ。ともかく細かいでしょう。こういうのが好きなんだそうです。聞いたことがあるんです。遅くまでやっているから、疲れるでしょうと私が言ったら「好きなんですもん」と。変な言葉遣いでしょう。

宇野：そういった息子さんからしか伺えないようなエピソードやお父様のお人柄を偲ばせるお話をお聞かせいただけて、本日は大変貴重な機会となりました。どんな人とも同じように穏やかに丁寧に接し、実直に日本の歴史研究と教育に携わってこられた方であること、しかも戦時中も戦後も日本人以外の学生たちに積極的に接し、教育を惜しみなくされたことが大きな発見でした。本日は、コロナ禍にも関わらず、駒場まで足を延ばしてくださり、誠に有り難うございました。

藤木：細かい事実が何も伝わらず、すみません。

宇野：いえいえ。今いらっしゃるこの 101 号館はまさに特設高等科教室だった建物ですので、そこで、当時の留学生に関わるお父様のご遺品を手に取っていただきながらお話を伺えて、大変貴重な時間となりました。心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

謝辞

すべての展示がそうであるように、今回のこの展示企画にも実に多くの方々の思いがつまっています。藤木邦彦が遺した貴重な史料（「藤木文書」）は、本学総合文化研究科地域文化研究専攻教授を務めた並木頼寿（1948-2009）の手を経て教養学部歴史学部会の教員に今日まで大切に受け継がれてきました。これらの史料をめぐっては、駒場内外の多くの方々が関連する情報やエピソードの数々を寄せてくださり、史料中に名前が記載された当時の留学生たちやそのご遺族からもご連絡をいただきながら、史料の背後にあった生活の温度が豊かによみがえってきました。時代を超え、民族や国家を超え、さまざまな立場のちがいを超えた、「人」と「人」の思いの通い合いが「藤木文書アーカイヴ」プロジェクトを支えています。さらに、この企画に関わってくださったすべての人々にとって共通の支えとなっているのは、いまわたしたちが共に享受している平和であるにちがいありません。平和のもとでの「人」の交わりこそは藤木がきっと抱いていたであろう望みであるでしょう。わたしたちはその望みを共にしながらこの企画を進めてきました。そして、展示をご覧いただくすべての方々にも同じ望みが伝わり、ここ駒場から、これからも永きにわたってよりよき「人」と「人」の関係が紡がれていくことを願ってやみません。

この場をお借りして、関係者の方々すべてに感謝の意を表したく存じます。特に、このたびの企画は「藤木文書」が駒場博物館に寄贈されたことによって可能になったものであることを記し、快く寄贈してくださった藤木成彦様には格別の謝意を申し上げます。

石井 剛（東アジア藝文書院副院長）

本展示にあたり、下記の方々にも大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。（敬称略、順不同）

藤木成彦、村田雄二郎（東京大学名誉教授・同志社大学）、大里浩秋（神奈川大学名誉教授）、孫安石（神奈川大学）、天野文彦（昭 24 理乙）、中川昭一郎（昭 24 理乙）、渡部武（昭 18 文乙）、工藤康（昭 26 年理甲三）、田仲一成（東京大学名誉教授）、林義春（昭 24 特理乙）、鄭廣良（昭 23 特文）、谷田和夫（詠帰会）、大原弘（昭 25 特文）、菱田憲昭（菱田屋）、山口輝臣（東京大学）、木寺ゆかり（東京大学）、藤澤匡樹（鳥取県立公文書館）、森本祥子（東京大学）、秋山淳子（東京大学）、佐藤慎一（東京大学）、田島俊雄（東京大学名誉教授）、冨岡勝（近畿大学）、白土悟（九州大学）、蔡珂（高崎経済大学）、松田良一（東京大学名誉教授・東京理科大学）、丹羽みさと（立教大学）、ニコロヴァ・ヴィクトリヤ（東京大学）

主 催 ：東京大学東アジア藝文書院（EAA）
共 催 ：東京大学大学院総合文化研究科・教養学部、駒場博物館
科学研究費：基盤研究（C）「狩野亨吉文書を活用した近代日本の高等教育および知識人交流の調査研究」（研究代表者：田村隆）

「藤木文書アーカイヴ」プロジェクトメンバー・執筆者：
宇野瑞木（東京大学東アジア藝文書院・特任助教）
髙山花子（東京大学東アジア藝文書院・特任助教）
高原智史（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・博士課程）
横山雄大（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻・博士課程）
宋舒揚（元・東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・博士課程）
小手川将（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻・博士課程）
日隈脩一郎（東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻・博士課程）

企画・運営：宇野瑞木

顧 問 ：石井剛（東京大学大学院総合文化研究科教授、東アジア藝文書院・副院長）
田村隆（東京大学総合文化研究科・准教授）
折茂克哉（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部・駒場博物館・助教）

監修協力者：荒川雪（王雪萍）（東洋大学社会学部メディアコミュニケーション学科・教授）
川島真（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻・教授）

編集者：髙山花子
デザイン協力者：齊藤颯人
発行者：東京大学東アジア藝文書院（EAA）

2022 年 3 月 22 日　初版第 1 刷発行

お問い合わせ先

東京大学駒場博物館
住所：153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
TEL：03-5454-6139
FAX：03-5454-4929